岩手県陸前高田市

# 門前貝塚

昭和49年10月

岩手県陸前高田市教育委員会

## 「門前貝塚」 正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 6 | 35 | 3類土器（拓影54～91.第20図⑥'⑦） | 3類土器（拓影54～86.第20図⑥.⑦.⑧） |
| 8 | 11 | 4類土器（87～111.第20図⑧） | 4類土器（87～111.第20図⑨） |
| 9 | 17 | 2類土器（121～128.⑪） | 2類土器（121～128第20図.⑫） |
| 9 | 21 | (C)（127～128.⑪） | (C)（127～128.⑫） |

岩手県陸前高田市

# 門前貝塚発掘調査概要

及川　洵
遠藤勝博
金子浩昌
柳沢清一
著

# 序

本市小友町字門前にある門前貝塚は、縄文中期、後期のものと言われ、昭和29年には岩手大学による発掘調査が行なわれ、その出土品には、門前式の名称がある特殊な土器形式の存在する有名な貝塚であります。

最近、開発の進むにつれて、これら貴重な埋蔵文化財が破壊される恐れがあり、特に今回、本遺跡地内にある市道門前線が拡幅工事の計画により、若干ではあるが損壊を余儀なくされたので、県教育委員会と協議の結果、緊急調査の必要があり、昭和48年７月発掘調査を実施いたしました。

この発掘調査にあたっては、県立高田高等学校遠藤勝博先生、県立一関第二高等学校及川洵先生に、多忙な時間を割いていただき、約一週間に亘る発掘を実施いたしました。その結果、本文記載のとおり、本遺跡の貴重な部分をまとめていただきました。

本調査書刊行にあたり、調査にあたられました、及川、遠藤両先生並びにご協力くださいました生徒諸君に対し、深く謝意を表し、発刊のことばといたします。

昭和49年10月

陸前高田市教育委員会
教育長　斉　藤　　栄

# 目　　次

序
はじめに
第1章　遺跡の位置 …… 1
第2章　調査の経過 …… 1
第3章　トレンチの設定及び層序 …… 2
第4章　遺　　構 …… 3
第5章　出土遺物(1) ―土器・石器― …… 3
　第1節　土　　器 …… 3
　(1)　第Ⅰ群土器 …… 3
　　1類土器　2類土器
　(2)　第Ⅱ群土器 …… 4
　　1類土器　2類土器　3類土器　4類土器　5類土器
　(3)　第Ⅲ群土器 …… 9
　　1類土器　2類土器　3類土器　4類土器　5類土器
　(4)　土製円板 …… 10
　(5)　土器についての考察 …… 10
　第2節　石　　器 …… 13
　　石皿・石斧・石匕・石鏃・凹石
第6章　出土遺物(2) ―動物遺存体・骨角器・貝製品― …… 14
　第1節　動物遺存体 …… 14
　(1)　軟体動物門 …… 14
　　腹足綱　二枚貝綱
　(2)　脊椎動物門 …… 14
　　硬骨魚綱・哺乳綱・鳥　綱
　　(参考付表) …… イ　軟体動物　ロ　脊椎動物
　第2節　骨角器・貝製品 …… 21
　(1)　骨　ベ　ラ …… 21
　(2)　有孔骨針 …… 23
　(3)　刺　突　具 …… 23
　(4)　釣　　針 …… 24
　(5)　貝製垂飾品 …… 25
参考文献 …… 27
あとがき …… 28

## 挿　図　目　次

第１図　門前貝塚付近の地図 …… 29
第２図　門前貝塚発掘地点付近の実測図 …… 30
第３図　第１地点、第２地点壁面実測図 …… 31
第４図　遺構実測図 …… 32
第５図　土器拓影図(1) …… 33
第６図　土器拓影図(2) …… 34
第７図　土器拓影図(3) …… 35
第８図　土器拓影図(4) …… 36
第９図　土器拓影図(5) …… 37
第10図　土器拓影図(6) …… 38
第11図　土器拓影図(7) …… 39
第12図　土器拓影図(8) …… 40
第13図　土器拓影図(9) …… 41
第14図　土器拓影図(10) …… 42
第15図　土器拓影図(11) …… 43
第16図　土器拓影図(12) …… 44
第17図　土器拓影図(13) …… 45
第18図　土器拓影図(14) …… 46
第19図　土器実測図(1) …… 47
第20図　土器実測図(2) …… 48
第21図　底部拓影・石器実測図 …… 49
第22図　石器実測図 …… 50
第23図　骨角器実測図Ⅰ …… 51
第24図　骨角器実測図Ⅱ …… 52
第25図　骨角(貝)器実測図Ⅲ …… 53

## 図　版　目　次

ＰＬ．１　門前貝塚の遠景 …… 54
ＰＬ．２　第１地点の貝層の堆積状況 …… 54
ＰＬ．３　第２地点の住居址 …… 55
ＰＬ．４　釣針の出土状況 …… 55
ＰＬ．５　土器出土状況(1) …… 56
ＰＬ．６　土器出土状況(2) …… 56
ＰＬ．７　骨角器出土状況(1) …… 57
ＰＬ．８　骨角器出土状況(2) …… 57

# はじめに

この報告書は、昭和48年６月23日より同年６月27日までの５日間、岩手県陸前高田市小友町にある「門前貝塚」の発掘調査をおこなった、その概要について記したものである。

門前貝塚は過去に多くの調査がおこなわれているが、とくに昭和29年に慶応大学の江坂輝弥氏や盛岡公民館勤務の吉田義昭氏によって調査され、この地方の縄文後期初頭の土器形式、いわゆる「門前式」をたてられた著名な遺跡である。調査は、昭和29年につくった４ｍ幅の道路を６ｍ幅の道路に広げ、屈曲を少なくする改修工事を行うことになり、遺跡の一部が消滅することになったので、この部分だけを緊急に調査することになったものである。

発掘調査にあたった及川と遠藤は、かつて昭和46年８月に市教育委員会の依頼をうけ、門前貝塚から約３kmほど西にある堂の前貝塚を調査した。この堂の前貝塚は、出土した土器形式からみて、門前貝塚とほぼ同じ時期につくられており、門前貝塚と比較検討することができた。

今回の調査は消滅する部分のみの発掘であったので、期間もみじかく、したがって出土遺物もそれほど多くない。しかし筆者らは、記録保存すべく、できるかぎりの努力をした。とくに土器においては、堂の前貝塚発掘調査の経験をいかし、縄文後期初頭の土器に対し、その出土状況については細心の注意をはらったつもりである。この分野の研究にいささかでも参考になれば、とかんがえたためである。しかし貝層の部分が少なく、貝層以外の場所では大部分が斜面なため、土砂の流れがみられ、遺物の年代推定にしばしば疑問がでたりした。したがって、すべて解明したわけでなく、この点いささか心残りな調査であった。しかし消滅する部分だけの調査であったので、これもやむをえないのかもしれない。

この調査に際し、陸前高田市教育委員会教育長斉藤栄氏をはじめ、委員会事務局や市文化財調査員のかたがた、特に市立博物館長千葉蘭児氏、社会教育課長吉田正人氏、同課長補佐佐藤吾一氏、および建設課黄川田新平氏にいろいろ御協力をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

## 第1章　遺跡の位置

門前貝塚は岩手県陸前高田市小友町字門前にあり、現在畑地になっている場所に6か所の小貝塚が形成されている。

遺跡は、北にある箱根山（446.8m）の山裾がなだらかに海岸まで続いている台地上につくられている。前方には広田半島の仁田山（254.2m）の支稜台地があり、現在は陸つづきになっているが、過去には広田半島は島になっていたといわれる。土地の人の話によると昭和35年（1960年）にチリ地震津波が三陸沿岸をおそったとき、小友浦からきた波と唯出浜（大野湾側）からきた波が、遺跡の前あたりで衝突したという。台地下の土地は低く、かつては、小友浦と唯出浜の間は海水が流れていたようである。現在でも谷地田が多く、数か所に沼が残っている。

遺跡のある台地は、ほぼ南北で250m、中央の鞍部付近の幅が約150mで、いわゆる舌状台地になっている。現在この台地は一部が宅地になっているが、その他は畑地である（鞍部付近の標高は約35m）。昭和29年の調査では、この台地上に4か所の貝塚を確認している。第1号貝塚から第4号貝塚がこれにあたる。さらに道路がこの台地をまわるようにつくられているが、その西側の2か所にも貝塚がある。第5号貝塚、第6号貝塚（標高約18m）がこれである。しかしこの第5号貝塚と第6号貝塚は昭和29年の道路建設で大部分が消えさり、今回の道路拡幅工事で完全に消滅したことになる。

この台地の東側にも小貝塚があり、門前東貝塚と名づけられている。縄文後期の土器片が出土しているという。このように門前貝塚には合計7か所の貝塚がつくられており、南面したゆるやかな丘陵、波のおだやかな内海など環境が好条件なため、この地で生活したものであろう。

この地方には遺跡も多く、とくに西方にある堂の前貝塚（縄文中期末葉～後期初頭）や矢の浦貝塚、獺沢貝塚、大陽貝塚、中沢浜貝塚など、多くの貝塚が残っており、さらに大船渡湾には小細浦貝塚、細浦貝塚、下船渡貝塚など、本遺跡と時期的にも関連のある貝塚が散在している。とくに西方約3kmほどのところに位置している堂の前貝塚は、門前貝塚と時期的に同時期であることがわかった。門前貝塚人は、こうした堂の前貝塚人をはじめ、広田湾岸や大船渡湾岸にいた貝塚人とも、なんらかの交流をおこなっていたのであろう。

## 第2章　調査の経過

調査は昭和48年6月23日より6月27日まで次の編成で実施した。

調査主催　岩手県陸前高田市教育委員会　　教育長　斉藤　栄

発掘担当者及び調査員

及川　洵（日本考古学協会員　県立一関第二高校教諭）

遠藤勝博（日本考古学協会員　県立高田高校教諭）

調査補助員　高田高校考古学同好会

小山順子、佐藤利枝子、佐藤典子、佐藤秀子、高木とり子、高橋久美子

一関第二高校史学部

高橋雅由、小野寺恵二、小野寺勝志、日下由美子、川島京子、菅原裕子

6月23日　二地点にトレンチを設定した。まず第1地点のA、C、E、G、Iの各区に着手したが、雷雨のため調査不能となり、台地上の第2地点に移った。溝状遺構を確認した。

6月24日　第1地点で、前日のものに加え、B、D、F、Hの4区の発掘も開始。第2地点の竪穴住居址の確認も続ける。地形の実測を並行して行う。

6月25日　第1地点は、A区を中心に調査を進める。第2地点の住居址の実測。

6月26日　第1地点の南東方向に、新たにD′、E′、F′の3区を設けた結果、貝層を確認した。第1地点の土層の実測。

6月27日　第1地点の貝層の発掘と全地点での各種実測。

## 第3章　トレンチの設定及び層序

道路拡幅工事にかかる区域の地表面を観察した結果、貝などの散布の顕著な、台地北側の凹地と、台地上の2つの地点を調査することとし、前者を第1地点、後者を第2地点とした（第2図）。第1地点には、ほぼ東西に2m幅で長さ2mのグリッドを東よりAからIまで9区設けた。後に、D、E、Fの3区の南側に1m幅でD′、E′、F′（F′は半分のみ）の3区を追加した。第2地点は、最初2m×2mの1区のみ設けたが、遺構検出のために拡張した。

第1地点は、大部分の区が以前に調査された形跡が明らかであり、層位が原形を保っていたのは、僅かにH、I区のみであり、しかもこの2区では出土品はほとんどない。第1地点拡張部の南側断面を観察すると、基本的には6つの層が認められる（第3図）。第1層は表土あるいは耕土層。第2層は黒色土層で15～20cmの厚さがあり、遺物を多量に包含している。第3層は貝層で、最も厚い部分では30cm位の堆積が認められる。貝層は南へ行くに従って厚みを増し、第1地点のAからI区ではほとんど認められず、わずかに耕土に散在するのみである。第4層は再び黒色土層で遺物を包含している。第5層は、その上面にはなお遺物の包含が若干認められる、暗褐色土層である。第6層は、全く遺物を包まない、いわゆる地山であり、色調は黄褐色である。

第1地点の全体を見ると、ゆるやかにたわむ地形の上に堆積している様子がみられる。なお南北方向にはかなりの傾斜が認められる。

第2地点では、地山に掘りこまれた竪穴住居の床面上に5層の堆積が確認された。第1層は耕土層。第2層は細かく砕けた貝片が混じる黒色土層。第3層は有機物に富むせいで漆黒色の土層。第4層は土器片を含む黒色土層。第5層は遺物を若干含んだ暗褐色土層である。

## 第4章　遺　　構

第２地点に遺構が発見された。発見された場所は、大きい道路から住宅へつながる細い道の分岐点にあたるところである。遠い過去においては、こうした道路はなく、この場所はゆるやかな南斜面であったはずである。遺構はこれらの道路のため破壊されており、一部分の検出だけに終ってしまった（第４図）。

この地点の層序は、第１層が表土（耕土）、第２層は混貝土層で第３層が第２層から続く層で漆黒土層である。第４層は黒色土層、第５層は暗褐色土層、第６層は黄褐色土層である。遺物は第２層から第４層にかけて多く出土した。第５層から大木９式に属する土器がわずかに出土している。その上の４層の下層から大木10式、上層から門前式土器が出土している。

遺構は第４層から掘り込んで地山まで達している。$P_1$は表土から約35cmで、多数の土器が炭化物にまじって出土している。$P_2$は約32cm、$P_3$は約53cmである。$P_2$と$P_3$を含んで周溝がみられた。また床面ははりつけている部分もあり、住居址と考えられる。発掘した部分の周溝の状態から推定すると、床面の形はほぼ不整円形になるように思われる。住居址の築造の時期は、床面およびとくにピット$P_1$から出土した土器が第Ⅰ群２類土器（大木10式の新形式）と第Ⅱ群１類土器（門前式）である。したがってこの住居址は、門前式の直前の頃につくられ、門前式の期間使用されたものと思われる。

## 第5章　出 土 遺 物 (1)

### 第１節　土　　器

今回の調査で出土した土器は、中程度のダンボールで14個あった。不明な一部分のものを除き、ほぼ分類、整理を行うことができた。以下はその概要である。

#### (1) 第Ⅰ群土器

この群に属する土器は、縄文中期末葉のもので、今回の調査では主として第２地点の第５層から１類土器、第４層の下層から２類土器が出土した。

**１類土器**（拓影１～４）

大木９式に相当する土器をこの類にふくめた。本類は、前回の調査と同じく、出土数はきわめて少ない。大木９式土器は、最近各地の調査で多数出土しており、９ａ式と９ｂ式に細分する考えが定着しつつある。９ａ式の特徴は隆起線による渦巻文の一端が楕円形の縄文区画文の上に配置されていたり、または縄文区画をとりまくような形で施されている。これに対し９ｂ式の方は渦巻文にも力強さがなくなり、沈線で描かれたものが多くなる。また、たての楕円縄文区画文だけのものもある。１類土器は、破損しているので、全体の文様をみることができないが、上の分類にしたがえば、９ｂ式になるようである。

**２類土器**（拓影５～12、第19図①、②）

器形は、復原した土器では深鉢形で単純な形である。口縁は外反するもの（５、８、①、

②）や内反させたもの（７、９、11、12）などがあり、その他、肩部でく字状にまがるもの（９、10、①、②）などがある。口縁上部には、４つのゆるやかな山形の隆起がついているものもある。

この２類に属する土器は、文様上からみると３種類に細分できる。(A)拓影５～６の肩部についている円形刺突状文をもつグループは、指先（とくに爪の部分）をもちいて施文したものである。器形は頸部がしまり、口縁が外反して開き胴部がふくらむ、大木10式の前半によくみられる器形になると思われる。

(B)線刻や点刻などの刻み目の文様をもつグループ（７、８、12）。この中で７と12は器面にそのまま、刻み目をつけたものであり、８は隆起線に横に刻み目をつけたものである。口縁部も前者は内反するものに対し、後者は外反するなど、こまかく検討すれば、これらはさらに２種類に細分されるであろうが、ここではこのままＢグループとして記録しておくことにする。

(C)連続刺突文の文様をもつグループ（９～11、①、②）。９は肩部をやや隆起させ、竹管文を連鎖状に刺突させたものである。拓影左側の口縁部に、たてに竹管文が施されている。10は連続竹管文が口縁部に１列、肩部に２列施文されている。11は口縁部に１列に施文されているのみである。第19図①は口縁部と胴部の中間に隆起線をつけ、そこに２個ずつの刺突を施している。そしてこの刺突をおこなったところから口唇に向ってヒレ状の隆起線をつけている。この隆起線のつく口縁上端は山形に高まっている。胴部の文様は沈線で「ノ」の字を画き、すり消し縄文をおこなっている。器形は胴部がいくぶんひきしまり肩部にかけて広がり、口縁が再びひきしまる感じのつくりである。土器は内外とも炭化物が付着している。第19図②も①と同じく肩部から口唇に隆起線をつけ、それに刺突して、連鎖状隆起線文にしている。肩部には横位の連続した刺突文がある。器形は①をさらにつよめた形で、胴中部や口縁部がきつくひきしめられた感じになっている。この土器は内面にいちじるしく炭化物が付着している。

**(2) 第Ⅱ群土器**

縄文後期に属する土器を第Ⅱ群にふくめた。この第Ⅱ群土器は、第１地点第４層、第２地点の第３層から出土している。とくに１類、２類の土器が第１地点D′E′F′の各トレンチの貝層内から出土していたため、前後の時期について、疑問の残る土器もあるが大筋については把握することができた。

**１類土器**（拓影13～21、24、第19図③）

この１類土器は、前回の調査で明らかになった門前式土器が中心になっており、本遺跡を代表する土器群である。今回の調査では、完形品は出土しなかったが、この形式の成立変遷を知る土器も出土しており、また復元図化できる土器も出土している。１類土器は(A)、(B)の２つのグループに細分できる。

(A)（13～16）は、門前式になる直前の土器である。13は中空把手の拓本であるが中央に穴

をあけ、周囲に隆線文をつけ刻み目を加えている。口縁も２段になっている。14は縄文を沈線で区画し、その周囲をすり消している。口縁に円形のくぼみをつけ、そこから鎖を１本さげている。これは大木10式の形式に、連鎖状隆線文をつけたもので、やはり門前式直前のもの（前・門前式土器）である。15、16は同一の器形と思われる。縄文を沈線で囲み、沈線のそばをさらに隆起線で囲み、そして一方には連鎖状文をつけている。この土器は破片がいくつか出土しているが、全体の器形はわからない。この土器もやはり前・門前式に属するだろう。

(B)（17～21、24、第19図③）は門前式の隆盛期につくられた土器である。このうち17～19は中空把手の拓本である。これは表面と内面間が中空になる豪華な把手で、隆起小円文、隆線文、沈線文、すり消し縄文などで施文している。とくに把手の中央あたりに穴・くぼみなどをつけ、その周囲や上方に「Ｓ」や「の」に似た沈線文様をつけているのも特色である。この沈線文様が、把手の内面につけられているものもある。20、21はすり消し縄文、隆線文、小円文などで連鎖状文はみられないが、門前式土器の最盛期につくられた胴部の破片なのでここに含めた。この土器の上になる部分には当然、連鎖状文がつくはずである。24はいわゆる門前式土器で、連鎖状隆線文がみられる。斜縄文の周囲を連鎖のある隆起線で囲み、それ以外をすり消す、門前式の典型的文様構成である。鎖は底部付近にもみられる。口縁は略式の二段口縁（隆帯を貼付したのみ）で把手は不明であるが、おそらくそれほど豪華なものではなかったであろう。

第19図③は門前式の完成された形である。この図は出土片にもとづいて復原図化したもので、口径約34cm、高さ約43cmほどの大きさになる。口縁には４つの発達した中空把手がつき、胴部から口縁部にかけてふくらみ、下胴部がひきしまり、底部がやや広がる器形である。そして口縁は中空把手の内側から続く上段口縁と中空把手の外側からつづく下段口縁が上下になってつながる「二段口縁」である。地文は斜縄文で、隆起線による連鎖状懸垂文によって区画し、すり消し縄文が発達する。さらに口縁や把手部に沈線渦文や竹管刺突文などの文様が施されている。全体的にみて、大木10式の文様から脱皮し、新しい形式の土器になったといえるだろう。

**２類土器**（拓影22～23、25～46、第19図④、⑤）

２類土器は主として第１地点第３層上部から出土している。口縁部は内湾しているものが多いが、やや外反するものや、「く」字状につよく外反するものもある。また地文では、たての撚糸文も多くなり、細い縄文を使って、きれいに施文しているものもある。さらにこの時期には、網目状撚糸文を施文した土器もみられ、斜縄文、たての撚糸文、網目状撚糸文と多彩な地文が展開している。この２類土器は、Ａ、Ｂ、Ｃのグループに細分することができる。

(A)（22～23、25～35、第19図④、⑤）は口縁部に隆起線をもつグループである。23は口縁に半円状の隆起線がつけられ、それに刻み目をいれている。これと同じ手法が22、23である。

口縁部と胴部を区分するように一本の隆起線をいれ、それに刻み目をいれている。体部には平行沈線をいれ、すり消し縄文が行われている。26、29は、小円文の連結がみられ、28は破損しているのでわからないが、やはり小円文がみられる。27も破損しているので不明であるが、同じ時期につくられたものと考えられる。29は横位の連続刺突文がみられる。この刺突をおこなっている隆起線は、22～28と同じように断面が三角形に高まっている。地文はたての細い撚糸文である。30～32は横位の連鎖状文がつけられている。これらはともに小円文があること（31～32とも拓影ではあきらかでないが、31では左はしに、32では右はしにみられる）、沈線による施文など、施文によるいくつかの類似点がみられる。なお30や31では、すり消し縄文が行われている。

33は隆起線のわきに刺突をおこなっているが、隆起線がヒレ状に口縁にはね上っている。また体部に下った隆起線が半円を描き、その先端から逆に２本の沈線が円を描く独特な文様が施されている。平行沈線間のすり消し縄文や口縁部が大きく内湾しているなど、この時期の他の器形、文様とくらべ相違がみられるが、ここでは一応Ａグループの中に含めておきたい。なおこの土器は器厚は約６㎜で、焼成は赤褐色を呈し良好である。

34、35ａ、35ｂはたての連鎖状隆線文と沈線文をもつ土器である。門前式土器よりいくらか新しい形式の土器として位置づけられるものである。

第19図④は、隆盛期の門前式を簡素化した作り方で、かつての中空把手は中空ではなく退化した形で残り、二段口縁や連鎖状文も同じく退化した形で残っているにすぎない。しかし胴部には沈線、すり消し縄文などが、最盛期の門前式にはみられない新しい文様を構成している。第19図⑤はさらに退化した形になっている。中空把手を示す装飾文様は、粘土を貼付しているのみである。また把手と把手の中間にあたる部分は、刻み目をもつ柱状の貼付文がみられ、肩部にあたる部分に、横位の刻み目が施されている。地文は網目状撚糸文である。器は内外面とも炭化物が付着し、とくに内面に著しい。この土器は下半分が失われているが、二次的な焼成をうけたために破損したものであろう。

(B)（36～50）は、口縁部が内湾しているものが多いが、43や46のようにやや外反するものや、44のように「く」字状につよく外反するものもある。口縁上部は波状を呈するものが多い。文様は地文の縄文、撚糸文に平行線や弧状、渦状、逆Ｓ字状、鈎状などの曲線的沈線を描き、流麗なすり消し縄文、すり消し撚糸文を展開している。また小円刻文をもつもの(39)、隆起（貼付）小円文をもつもの（40、42、43）、などがある。器厚は一般的に薄く、焼成も比較的良好である。

(C)（51～53）グループは地文の縄文がなく、沈線などで施文しているものである。51、52は、同一の土器である。53は沈線で文様を描き、それに縄文の押捺文様を加えている。２種類の土器だけであるが、これらは口縁部が外反し、口縁が波状を呈している。器は表面、内面ともなめらかになっている。

**３類土器**（拓影54～~~91~~86、第20図⑥、⑦⑧）

この土器は、主として第１地点第２層下部から出土している。これらは(A)、(B)、(C)の３つのグループに細分できる。

(A)（54～61、⑥）は、沈線文と竹管による刺突文をもつもの、およびこれらに類似する土器を一括した。54は口縁部に太い隆帯をつくり、それに刺突をおこなっている。左右に沈線文がみられる。55は前の土器のような隆帯はないが、口縁部と胴部の境の盛り上ったところに刺突を施している。口縁部には沈線による渦状文がある。55ｂは口縁部に２個の竹管文が施されている。56は拓影の右はじに、たての竹管文があり、胴部にすり消し縄文がある。57は拓影の両側にやはりたての連続竹管文がみられ、胴部には縄文はなく、斜めの沈線が１本みられる。58、59は同一の土器とおもわれる。58にはたての連続竹管文がみられ、沈線文で区画し、すり消し縄文がおこなわれている。このすり消し縄文は59も同様である。さらに58に１個、59に３個みられる小円文は、一見、貼付文のように感じられるが、竹管をもって刺突し、そのあと、表面の周囲をえぐって穴を大きくしたものである。そのさいに粘土が隆起し、あたかも粘土を貼付したかのような状態になったのである。施文方法は58、59とも同じである。60は網目状撚糸文と沈線区画のなかに刺突文がみられる。器厚は８～９㎜で暗褐色を呈し、砂の混入が多いため、ざらざらした感じである。61は沈線文で文様を構成したあとで、竹管文を施したものである（それは沈線上に小円の周囲がみられるからである）。器厚は約７㎜、褐色で焼成は良好である。第20図⑥は胴部に隆起線をつけ竹管によって、斜めに連続刺突をおこなっている。そしてこの刺突文の上方には曲線的沈線文によって文様を構成し、すり消し縄文を展開している。また口縁から頸部には４つの橋状把手がつけられ、頸部側にボタン状貼付文がつけられている。口径約17.5㎝、器厚７㎜、焼成良好である。

(B)（62～66）は、堀之内Ⅰ式の特徴の１つであるたての沈線波状文をもつ土器群である。62は沈線波状文のところから斜めに平行沈線文がでており、63は地文のない器面に波状文が描かれている。64は口縁部から地文の縄文の中にくっきりと波状文を描き、一部にすり消し縄文もみられる。また65は口縁部を約1.5㎝の細い帯状にすり消し、その下に沈線による直線と波状文を対応させて文様を構成し、それがすり消し縄文とあいまって、独特な文様をつくりあげている。66は口径約22㎝で、胴部がややふくらむ筒形の土器である。口縁部をヘラ状器具で約７㎝ほどすり消し、小円刻文とたての沈線波状文のみの文様にしている。口縁はいくぶん波状を呈すようである。この土器は表面、内面とも炭化物が付着しており、暗褐色を呈している。

(C)（67～86）は、この時期に属するその他の沈線文の文様をもつ土器を一括した。67、68は同一の器形である。69～71とともに直曲の沈線文をもって文様を構成している。72、73、74は口縁部に波紋状沈線文をもつ土器で、78も同じ文様構成のある土器といえるだろう。この文様が76～83の口縁部文様へと発展していくようにおもわれるが、ただ前者から後者へ発展する中間の土器がないので、明らかではない。しかしこの文様帯が次の４類の文様帯に影響をあたえていることは、拓影にみるとおり明らかである。76、77は直曲の沈線文を体部に

施している。この文様と構成は別であるが、81～85にも同様にみられる。84、85は同一の土器である。折り返し口縁と沈線文が特徴である。

第26図⑦は縄文のみで、その他の文様は施されていない。器形は３か所で口縁が隆起し、それに突起がつけられている。下部には台がつくとおもわれるが、破損しているので不明である。さて、この土器をどこに分類すべきか、関東地方では堀之内式や加曽利Ｂ式にときおりみられる器形である。ここでは出土した層位にもとづいて、ここにいれておくことにしたい。

同じく第20図⑧は、底部から口縁部に向って開く鉢形である。文様は沈線だけである。この土器はていねいなつくりで、内面もなめらかに整斉されている。器厚は３㎜で焼成は良好である。底に木葉文がみられる。

**４類土器**（87～111、第20図⑧）

これらの土器は(A)、(B)、(C)グループに細分できる。主として第１地点第２層上部から出土している。

(A)（87～89）は沈線文様のある土器で、前形式の影響が残っているが、やや発展した文様をもつ土器とみられるグループである。87は口縁を折り返し状に厚くし、口縁部のみに２本の沈線を用いて文様を施している。胴部は縄文のみのようである。88は体部まで直曲、波状沈線文を施している。89は施文は口縁部のみで、胴部にはおこなわれていないようである。これら(A)グループに属する土器は赤褐色を呈し焼成は良好である。

(B)（93～111）は、平行沈線文とすり消し縄文を用いた文様の土器群である。出土した土器をみると、このグループの器形は、頸部がひきしまり、口縁部が外反し、肩部ないし胴の上部がややふくらむ形が多い。口縁はゆるやかな波状の起伏を呈するようである。93、95は文様に平行沈線をつかって大きな波形をえがいている。とくに93はその波形の中に縄文の押圧文がみられる。その他、94～104までは縄文をはさむ直曲線の文様がみられるが、105～109では直線による平行沈線文が多くなっている。これは次の形式に移行する形態とみることができよう。110、111は平行沈線文になり、加曽利$B_I$式に類似する土器である。

(C)（90～92）は、文様に横位の沈線のある土器群である。ただ、90、91は沈線のみの文様であるのに対し、92はくし歯状による文様である。今回の調査では、この文様の土器はここに掲げた１点のみで、時期も不明であるが、一応ここに含めておいた。

第20図⑨は４類に属する小形の土器である。器形は口縁部が外反する深鉢形に類似している。文様は口縁部に３本の平行沈線を施しすり消し縄文をとり、また胴部には沈線でたてと横の楕円形を描き、その部分をすり消して変化のある文様につくりあげている。胴の下部から底部にかけて、無文である。内面は、胴の上部から口縁部に炭化物がいちじるしく付着している。しかし胴の下部から底部には付着していない。大きさは、口径が約10.6㎝、高さが約10.5㎝である。

**５類土器**（拓影112～118）

第Ⅱ群の１類から４類まで出土している土器以外の土器を一括して５類土器とした。112は器面がよく研磨されている。文様は縄文をやや太い沈線で区画したものである。この土器は表面、内面ともベンガラがつけられている。113～117は、縄文を細い直曲線文で区画し、すり消し縄文を展開させている。これらの土器は、細い縄文や沈線の施文方法からみて、ほぼ同一の時期に属すると思われる。118は口縁部の破片である。縄文を沈線で区画し、すり消し縄文をおこなっている。縄文帯には、沈線にそって刺突文が連続している。器形は口縁が厚くつくられ、口縁部内面に一本の隆帯がある。この土器は他の出土土器にくらべ、独特なつくりである。ただこれ一個のみなので比較検討することができない。

**(3) 第Ⅲ群土器**（拓影119～143、第20図⑩～⑫）

第Ⅲ群土器は粗製土器を一括した。これらの土器はすべて第Ⅱ群土器と同一の地層から出土しており、縄文後期に属するものである。第Ⅲ群土器を１類～５類に細分し、説明をおこないたい。

**１類土器**（119～120、第20図⑩、⑪）

この類は、斜縄文が施され、口縁部がやや内湾する器形の土器である。第２地点の門前式土器（第Ⅱ群１類土器）と伴出している。したがって１類土器は門前式土器の粗製土器とかんがえられる。⑩に、たての短い綾絡文がみられる。

**２類土器**（121～128、⑪）第20図 ⑫）

撚糸文を一括してこの類にいれた。３つのグループに細分できる。(A)グループ（121、122）は単節のたての撚糸文である。口縁はわずかに内湾している。(B)グループは網目状撚糸文である。123、124は口唇から施文されているのに対し、125、126は肩部付近から下方に施文している。器形は口縁がやや外反し、口縁上部が波状を呈するものもある。（C）(127～128、⑪)グループは無節の細い縄文を使用した撚糸文の土器群である。器形は平縁が多い。127は撚糸文のほかに、斜めの短かい沈線文が施されている。本類の土器は胎土に砂粒の混入が少なく、緻密である。焼色は褐色で固く焼かれている。

**３類土器**（129～134）

本類は口縁部に地文の施文がなく、胴部に縄文が施されている土器を一括した。器形は口縁部がやや外反し、口縁が大きく波状するもの（129）、と平縁のものとに分けられる。また肩部に縄文側面の押捺文が１本あるもの（130、131）、押捺文が２本あるもの（132、133）、または４本みられるもの（134）、などがある。さらに口縁上部に縄文の施文のあるもの（130、133）もある。

**４類土器**（135～140）

この類は、口縁部の中央をすり消して、口縁上部に縄文の残されている土器を一括した。これも前類と同じように、縄文押捺文がみられる。肩部に１本押捺されているもの（136、137）、口縁上方と肩部に縄文押捺文のあるもの（138、140）、および数本みられるもの（139）がある。そして139、140はこの押捺文を使って独特な文様を施しているが、破片な

ため、残念ながら全体的な文様は不明である。

**5類土器**（141～143）

折り返し口縁のある土器を一括した。拓影は３個のみであるが、この類の土器は多く出土している。口縁部はいずれも外反し、口縁上部は波状を呈すものと平縁のものとがある。この類も前類と同様に縄文の押捺文がみられる。141、142にはないが、143には口縁部上方に１本と肩部に１本と合計２本の押捺文がみられる。

**⑷ 土製円板**（第16図１～４）

今回の調査では、全部で４個採集された。いずれも土器片を利用したものである。これまで土錘と考えられ、そのように分類されたりもしていたが、これには溝もなく、使用方法が不明なので、土製小円盤として分類しておきたい。４個とも縄文後期に属するものである。

①もっとも小さく2.5cm×2.5cm×0.7cm表面に縄文、６g の重さである（Ⅰ－Ａ－２）。

②破損品である。推定４cm×４cm×0.8cm、表面に縄文、重さは残った半分のみで８g である（Ⅰ－E′－２）。

③たいへん薄手の土器を使用した製品である。表面に２本の沈線がみられる。3.4cm×3.1cm×0.5cm、重さ６g である（Ⅰ－Ｇ－２）。

④表面に縄文がある。大きさは3.7cm×3.7cm×0.9cm、重さは17g である（Ⅱ－拡－２）。

底部について＝　底部は拓影第21図にみるとおり網代文と木葉文がみられる。このほかに無文のものもあるが、無文底には何らかの圧痕がみられる。底部については、これまでも研究されているし、体部と分離した底部を論じても、地面につかない面もあるので、ここでは以上のように拓影を紹介するだけでとどめたい。

**⑸ 土器についての考察**

今回の調査で出土した土器を前述のように分類したのであるが、これらについて編年的位置づけを試みてみたい。

中期末葉の土器について、岩手県内においても次第に資料が増加し、とくに大木９式、10式について再吟味しようとする動きがでてきている。大木９式については２形式、大木10式についても同様に２形式ないし３形式に細分できるようである。しかし土器形式の編年的位置づけは容易ではない。遺跡の堆積層を正確に把握し、各層の土器類型の変遷をあきらかにしていくという、もっとも基本的な、そしてもっとも正確な方法が、実はいろいろな制約があってなし得ない状況にある。この制約については調査員は痛い程身にしみて感じている事柄であろう。しかし前述のように調査が進み資料が増加しつつある。層位学的方法とともにこれに形式類型学的方法を加味することにより、さらに正確さを増すことができよう。だがそれは一地域のみの把握であってはならない。広範な地域にわたって比較検討することが必要となってこよう。

ところで第１群１類は、大木９式に比定できる土器である。拓影の説明の中で書いたように、大木９式は 9a式と 9b式に細分する考えが定着しつつある。これによれば、 9a式は隆起線による文様、 9b式は沈線による文様構成を主体に展開しているといわれる。この分類によるとこの１類土器は、 9b式に分類されることになろう。

第Ⅰ群２類土器は、１類に続くものであり、全体的にみれば大木10式に分類されるものである。しかし大木10式においては、論ずべき点が多い。このことについては、かつて「堂の前貝塚」の報告書で幾分述べたことがある。それは大木10式も９式と同様に、隆線文による文様構成と沈線文による文様構成を主体とする土器があること、さらにこの２類土器のように、口縁部に円形刻文や連続刺突文などをもつグループが層位的にあきらかに上下の関係においてとらえられていることなどであった。最近この時期をとりあげた報告書の多くが、やはりこうしたことを指摘しているのであるが、まだ形式設定にはいたっていない。したがってここでは第Ⅰ群２類を大木10式のもっとも新しい時期の土器、とだけ記しておくことにしよう。

第Ⅱ群１類土器は門前式土器かまたはそれに近い土器である。ところで門前式土器とはどんな土器をいうのであろうか。これまでは連鎖状隆線文をもつ土器を中心に考えていた。しかしこの分類はあいまいで、時には誤りが生じていた。それは縄文中期末葉から後期初頭の土器が出土する遺跡では、門前式が少量しか出土していないのにもかかわらず、その前後の土器をも門前式に含めて分類してしまう場合があった。これは連鎖状文にとらわれすぎて分類したためにおこった誤りである。

それでは門前式土器とはどれをさしていうのであろうか。われわれはこの土器を次のように把握したい。それは第19図③にみられる土器で、拓影では(B)グループ（17～21、24）がこれに該当する。その特徴は、胴下部がしまり、胴上部がふくらむ器形で、口縁がやや内湾し、４つの中空把手と二段口縁をもつ。文様は隆起線をもって縄文を区画し、すり消し縄文をおこなっている。さらに連鎖状隆起線文をはじめ沈線によるＳ字状や逆Ｓ字状文、渦文などの文様が施されている。この時期の地文は斜縄文が多く、網目状撚糸文はないようである。以上を門前式土器の主要な特徴であると考えたい。

そうすると、第Ⅱ群１類の(A)はまだ門前式にいたっておらず、14～16は大木10式の文様に隆線文および連鎖状文が施されているにすぎない。ここでは門前式の直前の土器という意味において「前・門前式土器」と呼んでおこう。

この形式に対し、第Ⅱ群２類は門前式土器の後続形式または退化した形式とみることができる。とくに２類(A)は隆線文、連鎖状文、連続刺突文、それに沈線文とすり消し縄文などの文様をもつ土器群で、門前式の名残りをとどめながらも、次のモチーフが随所にみうけられる。したがってこれを門前式とみることはできない。門前式の直後の土器という意味からここでは一応「後・門前式土器」と呼んでおきたい。

２類(B)は門前式のときに華やかに展開されていた隆線文が消えさり、地文の縄文や撚糸文

を弧状、鈎状、渦状、倒卵状の曲線的沈線文で区画した、すり消し縄文やすり消し撚糸文を中心に文様が構成されている。こうしたことからみて、２類(B)は２類(A)よりさらに後出となり、門前式とはっきり区別されるべき土器であろう。またほぼ同じ時期と思われる２類(C)についても同様のことがいえよう。

ところで、これらの土器の編年的位置や、他の遺跡から出土している土器との併行関係はどうであろうか。第Ⅱ群１類(B)は門前式であり、この形式の土器は、堂の前貝塚（陸前高田市）、長谷堂貝塚（大船渡市）、崎山弁天遺跡（上閉伊郡大槌町）、貝鳥貝塚（東磐井郡花泉町）、樺山遺跡（北上市）などから出土しており、地形により違いはあるが、門前貝塚を中心に、ほぼ円形に波及していることがわかる。さらに気仙地方や樺山遺跡から良好な資料が出土しているが、その他の遺跡からは、門前式土器の出土量は極めて少ない。松島湾付近の貝塚から出土している土器では、隆線文と刺突文ないし連鎖状文をもつものがあるが、門前式とは大きくへだたりがあり、地域差が明らかである。さて、門前式土器が編年的に大木10式より時間的に後出であるという点においては間違いない。そして、第Ⅱ群２類土器はこの門前式からみて、層位的にもわずかであるが後出であった。この層位における差異は、門前貝塚では厚いところで約30cmの貝層の下部に第Ⅰ群２類(C)があり、そして貝層のいちばん上（もしくは第２層の最下部）から第Ⅱ群３類(A)（とくにあきらかな第20図⑥）が出土している、という状態で、考えられたほどの大きな時間的な差異はない。ところで、関東地方の称名寺式との関連はどうであろうか。たしかに第Ⅱ群２類(B)、(C)のなかに称名寺式に類似する土器もみられる。しかし称名寺式は福島県あたりまでは、つよい斉一性をもって分布するが、松島湾付近では変形した土器が出土するといわれる。そしてこの松島湾付近の後期初頭の土器と、門前式あるいは第Ⅱ群２類との関連についても、門前式そのものの出土範囲が限られていることもあり、残念ながら現段階においては明らかにすることはできない。これは近い将来ぜひとも解明しなければならない課題の一つであろう。

第Ⅱ群３類土器は、２類土器において盛行していた撚糸文が減少し、器形的には頸部のくびれがつよくなり、文様上から刺突文、たての波状文・波紋状沈線文・同心円的文様などや数条の平行沈線文をもつものなど、２類土器と異った文様が多い。この中には関東地方の堀之内１式に大変類似した文様をもつ土器も出土している。こうしたことから３類土器は、堀之内１式に併行する土器と考えられる。

つぎの４類土器は今回の調査では出土量も多く、土器は焼成も比較的良好である。本類は文様的特徴から東北地方北半の大湯式や十腰内１式に、関東地方の堀之内Ⅱ式に併行する土器と考えられる。ただ大湯式にみられる入組文や十腰内１式の同心円文などや、堀之内Ⅱ式の特徴である口縁部の裏面に数本の沈線が施され、器表面には無文の部分を帯状に残して隆起線を一条つけ、その上に刻み目や８の字形の粘土紐をつけるなどの装飾は施されていない。しかし平行沈線を主体とし帯状のすり消し縄文を主文様とする点、88にみられるような沈線ではあるが８の字形がみられ、また、大湯式や十腰内１式の波状沈線文がみられるなど、全

体的な文様構成からみて、ほぼ大湯式や十腰内１式や堀之内Ⅱ式の時期に併行すると考えられる。３類(C)の90、91の沈線文グループは、堀之内Ⅱ式の斜線的沈線文より加曽利$B_I$式の横位中心の沈線文の系統に近いとみるべきかもしれない。同様のことは110、111の土器についてもいえる。これらも加曽利$B_I$式に類似する土器であるといえるだろう。

５類土器は４類の後続型として理解される。中には堀之内Ⅱ式のモチーフがまだ残っているものもあるが、ほぼ加曽利$B_{II}$式に併行する土器と考えられる。松島湾付近では宮戸$II_b$式がこの時期にあたる。118は曲線的すり消し縄文を施し、沈線文の内側に刺突文を連続させている文様である。これは加曽利Ｂ式の時期に少量ずつ出土する土器と考えられている。今回の調査は、この土器１点のみであった。さて、この時期の縄文の施文は、よこの羽状縄文とともに、たての羽状縄文のあることが指摘されているが、今回の調査ではたての羽状縄文を施文した土器は見あたらなかった。しかし113～117のように、これまでと比べ、非常に細い縄文が使用されていることに注目したい。

第Ⅲ群の粗製土器は、土器の説明文のなかに書いたように１類は門前式土器と伴出しており、この時期の粗製土器であろうと考えられる。２類土器は撚糸文グループである。精製土器で撚糸文が数多く使用されているのは、第Ⅱ群２類(A)である。したがってこの２類土器は、ほぼ第Ⅱ群２類の時期と併行すると思われる。３類や４類は口縁部の器形からみると第Ⅱ群３類から４類などの時期に類似し、よこの羽状縄文の施文方法においても類似がみられる。また出土した層位から考えても、ほぼこの時期の粗製土器と思われる。第５類は第Ⅱ群３類(C)グループの84、85が折り返し口縁になっている。この時期の粗製土器と考えられる。この５類土器は代表として三個のみ掲げたが、出土している破片数は多い。

### 第２節 石　　器

出土総数12点。内容は、石皿３点、石斧５点、石匕１点、石鏃２点、凹石１点である。石匕、石鏃のように破損しにくいものを除き、すべて破損品であった。石鏃（第22図11）以外は、すべて第１地点の耕土または攪乱部より採集されたものである。

① 石皿（第21図１～３）

３点のうち２点（１、２）は、四つの台がつくものと思われる。いずれも粒の粗い砂岩製品。

② 石斧（第22図５～９）

完形のものは１点もないが、磨製の刃部が使用可能なものが２点（５、６）、磨製石斧の廃品を加工して、打製の刃部を使用したと推定されるものが２点（８、９）ある。なお、（５）は、研磨不十分のために片面に打撃痕がみられる。

③ 石匕（第22図10）

硬質頁岩製品で、片側にのみ刃部が作り出されている。

④ 石鏃（第22図11、12）

いずれも硬質頁岩製品で、無茎のもの（11）は、第２地点の第Ⅴ層出土。

⑤　凹石（第22図４）

細長い自然石を利用したと思われる。直径１㎝足らずの不整形の凹みが２コ認められる。

## 第６章　出土遺物(2)

### 第１節　動物遺存体

**(1) 軟体動物門**　Phylum Mollusca

腹足綱　Class Gastropoda

1．ユキノカサ：*Acmaea pallida*

2．コシダカガンガラ：*Omphalius rusticus*

3．ツメタガイ：*Neverita* (*Glossaulax*) *didyma*

4．ウミニナ：*Batillaria multiformis*

5．タマキビ：*Littorina brevicula* (*Philippi*)

6．アカニシ：*Rapana thomasiana*

7．イボニシ：*Thais clavigera*

8．チヂミボラ：*Nucella heyseana*

二枚貝綱　Class Bivalvia

1．ベンケイガイ：*Glycymeris* (*Veletuceta*) *albolineata*

2．マガキ：*Crassostrea gigas*

3．アサリ：*Tapes* (*Amygdala*) *japonica*

4．ウチムラサキ：*Saxidomus purpurata*

5．シオフキガイ：*Mactra veneriformis*

6．ヒメシラトリガイ：*Macoma incongrua*

7．オオノガイ：*Mya* (*Arenomya*) *arenaria oonogai*

**(2) 脊椎動物門**　Phylum Vertebrata

硬骨魚綱　Class Osteichthyes

1．マダイ：*Pagrus major*

2．マグロ類：*Thynnus sp*

3．スズキ：*Lateolabrax japonicus*

4．ブ　リ：*Seriola quinqueradiata*

哺乳綱　Class Mammalia

1．イノシシ：*Sus scrofa leucomystax*

2．ニホンジカ：*Cervus nippon nippon*

3．ノウサギ：*Lepus brachyurus*

4．タヌキ：*Nyctereutus procyonoides viverrinus*

5．クジラ類：*Cetacea fam. indet.*

6．イルカ類：*Delphinidea gen. & sp. indet.*

7．ニホンイヌ：*Canis familiaris var. japonicus*

鳥　綱　Class Aves

1．キ　ジ：*Phasianus (colchicus) versicolor*

2．カラス類：*Corvus sp.*

（参考付表）

昭和29年調査・動物遺存体種名表（重複する種名については省略した）

Ⅰ　**軟体動物**　　腹足綱

アワビ・エゾタマガイ・クボガイ・トカシオリイレ・バテイラ・レイシ

斧足綱

アズマニシキ・イガイ・イソシジミ・イタボガキ・ウバガイ・オキシジミ・オニアサリ・ハマグリ・ホタテガイ・ミルクイ

Ⅱ　**脊椎動物**　　魚　綱

エイ科の一種・カサゴ科の一種

哺乳綱

アナグマ・テン

門前貝塚より採集された動物遺存体は、上表に示したように、軟体動物・腹足類８種、二枚貝類７種、脊椎動物・魚類４種、哺乳類７種、鳥類２種の合計28種類である。これに昭和29年の調査資料註(1)を加えると、軟体動物・腹足類14種、二枚貝類17種、脊椎動物・魚類６種、哺乳類９種、鳥類２種の総計48種となる。

註(1)　吉田義昭：「門前貝塚」盛岡市公民館　昭和35年

まだ、種名の同定に至っていない資料を若干残しているが、上記28種は本貝塚に埋存している動物遺存体の大要を示していると考えて差し支えないであろう。

以下、上記の標本について必要な事項を記載し、最後に考察を試みることにしたい。なお報文中の計測数値は断りのない限り、（cm）を単位として採用している。L・H・D の略号は、それぞれ貝類の「殻長」・「殻高」・「殻径」を表わしている。

**イ　軟体動物**

貝　類

1．ユキノカサ：L．3.8、H．1.9

Ⅰ－E′－３層より１個採集。

2．ツメタガイ：H．5.0、D．5.2

Ⅰ－F′－３層より１個採集。

3．ウミニナ：H．2.9～3.9、D．1.3～1.5

Ⅰ－E′－３層より10個採集。

4．タマキビ：H．1.4・1.7、D．1.2・1.5

Ⅰ－E′－3層より2個採集。

5．アカニシ：H．計測不能　D．10.0以上

大型のアカニシで破損が著しい。

6．イボニシ：H．4.0、D．2.3

Ⅰ－E′－3層より1個採集。

7．チヂミボラ：H．2.1～3.0、D．1.3～2.0

Ⅰ－E′－3層より7個採集。

8．マガキ：H．7.6～14.0

Ⅰ－F′－3層より10個体余を採集。

10㎝級が目立った存在。

9．シオフキ：H．1.3、L．4.1

Ⅰ－E′－3層より1個採集。

10．オオノガイ：H．2.0、L．9.7

Ⅰ－E′－3層より3個体余を採集。

4㎝級で良好な成育状態を示す。

11．アサリ：H．0.7～1.3、L．2.6～4.3

Ⅰ－E′－3層より5個採集。

12．シラトリガイ：H．0.6～0.7、L．3.2±

Ⅰ－E′－3層より2個採集。

13．ウチムラサキ：H．1.7、L．7.4

Ⅰ－E′－3層より1個採集。

14．コシダカガンガラ：H．2.4、D．2.9

Ⅰ－F′－3層より1個採集。

15．ベンケイガイ

垂飾品。骨角器・貝製品の項参照。

貝層の貝種構成についてブロック・サンプリングに基づいた詳細な観察を行なうことはできなかったが、任意に採取された標本によると、「マガキ」が貝層（3層）の主体を占めていたと思われる。これについでアサリ・ウミニナ・チヂミボラの幼貝・オオノガイなどが目立ち、他の貝種の存在は稀であった。

前回の調査（昭和29年）で本貝塚（第1号～6号貝塚）を構成する主体的貝種として報告されたイガイはまったく検出されていない。これに対しマガキが多数採捕され、その成育状態も良好であることは注目されてよい。また、内湾砂泥性貝類の代表種とされるハマグリの採捕が稀であったことは興味深い事実として特筆される。

**ロ　脊椎動物**

魚　類

1．マダイ

マダイは本貝塚から最も豊富に検出されている魚種で、他種を完全に圧倒する地位を占めている。その大きさには明瞭な相違が認められる。体長の推定復元を行なった結果、前上顎骨でみた場合45～55cm級と30～40cm級の２グループの存在が明らかとなった。出土量は前者の方がはるかに多い。捕獲の主対象は大型魚にむけられていたのであろう。マダイの各部位骨は比較的平均した出土傾向を示しているが、やはり椎骨はきわめて稀な存在であるらしい。

計測数値等々は以下の表に示したとおりである。

a）前顎骨（Premaxillary）

| | 出土区・層位 | P－L |
|---|---|---|
| R | 1－D－3 | (5.0 ±) |
| | 1－F′－3 | (5.0 ±) |
| L | 1－D－3 | 5.1 |
| | 1－D－3 | 現存 4.77(5.5～5.7) |
| | 1－E′－3 | 現存 4.25(5.0 ±) |
| | 1－F′－3 | ／ |

＊ P－LはPremaxillary Length（前顎骨長）　＊ 上記資料はすべて異個体である。

＊（ ）は推定値。標本を作図し、計測推定した。／は計測(推定)不能を示す。以下同様。

b）上顎骨（Maxillary）

| | 出土区・層位 | M－L |
|---|---|---|
| R | 1－D－3 | 現存 5.27 (5.4±) |
| | 1－D－3 | 現存 5.3 (5.4±) |
| | 1－D－3 | 現存 5.29 (5.4±) |
| | 1－E′－3 | 現存 4.88 (5.4>) |
| L | 1－E－3 | 現存 4.20 ( ／ ) |
| | 1－E′－3 | 現存 5.91 (6.0±) |
| | 1－E′－3 | 現存 5.90 (6.0±) |
| | 1－D－3 | 現存 5.28 (6.0±) |
| | 1－G′－3 | 現存 3.33 ( ／ ) |

＊ M－LはMaxillary Length（上顎骨長）　＊ 上記資料はすべて異個体である。

c）歯　骨（Dentary）

| | 出土区・層位 | D－H(mm) | D－L |
|---|---|---|---|
| R | 1－E′－3 | 9.05 | 現存 3.96 (4.1～4.2) |
| | 1－F－3 | 9.4 | ／ |
| | 1－D－3 | 12.1 | 5.1 |
| L | 1－E′－3 | 11.7 | 現存 3.19 ( ／ ) |
| | 1－F－3 | 13.5 | 5.04 |
| | 1－G′－3 | 8.3 | ／ |

＊ D－Hは、Dentary Height（歯骨高）　D－Lは、Dentary Length（歯骨長）

以上のほかに、なお次の各部位の骨があった。

前頭骨

Ⅰ－D－3層より3個出土。

Ⅰ－E′－3層より3個出土。

Ⅰ－F′－3層より1個出土。

上後頭骨

Ⅰ－E′－3層より3個出土。

Ⅰ－F′－3層より3個出土。

Ⅰ－G′－3層より1個出土。

節　骨

R：Ⅰ－F′－3層より1個出土。

L．Ⅰ－E′－3層より1個出土。

Ⅰ－F′－3層より1個出土。

鰓蓋主骨

R．Ⅰ－E′－3層より2個出土。

関接部直径は、1.1と0.8を測る。

椎　骨

Ⅰ－E′－3層より1個出土。

椎骨高1.2を測る。

2．マグロ

大小とり混ぜ11個の椎骨と頭部骨の破片1個が採集された。椎骨の計測値はD－H（椎体径×高さ）で示した。

Ⅰ－F′－3層より4個採集。

3.2×2.6，3.1×2.6，4.8×4.3，4.8×4.4

Ⅰ－E′－3層より6個採集。

2.9×2.1，3.5×2.8，4.1×不明

他に計測不能資料が3個。

Ⅰ－D－3層より1個採集。

3.9×3.5

Ⅰ－D－3層より頭部骨片を採集。

3．スズキ

スズキの遺存骨は意外に少なかった。検討を要する。

a）前上顎骨(L)：Ⅰ－E′－3層より1個出土。

b）歯　骨　(L)：Ⅰ－E′－3層より1個出土。

D－H：7.9㎜、D－L：不明

c)節　骨(L)：Ⅰ－E′－3層より1個出土。

d)鰓蓋主骨(L)：Ⅰ－E′－3層より1個出土。

e)椎　骨　　Ⅰ－E′－3層より1個出土。

椎骨高は1.1を測る。

4．ブ　リ

a)歯　骨(R)：Ⅰ－E′－3層より1個出土。

計測不能。

哺 乳 類

魚貝類に較べ、哺乳類の出土量は少ない。各種ともせいぜい数個体分の捕獲が知られるだけで、狩猟活動の実態を把握するに十分な資料が採取されたとは言い難い。以下、その概要について述べることにする。

1．イノシシ

a)下顎骨：Ⅰ－E′－3層

♀ R.〔$P_3$～$M_1$〕・(但し$P_{1\cdot2}$、$M_2$脱落)

♀ L.〔$P_4$～$M_2$〕・〔$M_3$未出〕・(但しC・$P_{2\cdot3}$脱落)

幼獣期の後半・「幼獣期Ⅱ」註(2)に分類される雌の若い個体。生後18～20ケ月前後を経過していると推定される。5月出産とすれば12月～3月（冬期）のあいだに捕獲されたことになろう。

b)下顎連合部：Ⅰ－F′－3層

雌。右側の犬歯槽を残す断片骨。犬歯はすでに脱落。

c)上腕骨(L)：Ⅰ－E′－3層より遠位端が1個出土。

d)犬　歯(R)：層位不明（3層）　　人為的な截断痕をとどめる。

註(2)　筆者の一人柳沢は、イノシシの一生を幼獣期Ⅰ・Ⅱ、若獣期、成獣期、老成獣期と分類している。

2．シ　カ

a)下顎骨体：Ⅰ－？－3層より1片出土。

歯列の遺存する下顎骨体は検出されなかった。

b)寛　骨(R)：Ⅰ－D－3層より1個出土。：成獣。

c)中足骨(L)：Ⅰ－F′－3層より近位端が1個出土。

d)踵　骨(L)：Ⅰ－F′－3層より1個出土。

e)截断鹿角片：Ⅰ－F′－3層より2個出土。他に不明が一点。

f)落　角：Ⅰ－？－3層より角座径6.1を測る落角1個を採集。叉部に明瞭な切断痕をとどめている。

3．ウサギ

a)上腕骨(R)：Ⅰ－E′－3層より1個出土。

b)橈　骨(R)：Ⅰ－E′－3層より1個出土。

4．タヌキ

a)第1頸椎(環椎)：Ⅰ－E′－3層より1個出土。

5．クジラ類

Ⅰ－E′－3層より断片骨が2個検出されている。いずれも未加工品。

6．イルカ類

種の査定は未了であるが、Ⅰ－E′－3層より椎骨3個が出土している。

7．ニホンイヌ

Ⅰ－D－3層より一個体分（埋葬後に移動か攪乱を受けたものと推される）の成獣の遺存骨がまとまって検出されている。その大きさは中型犬の小形の部類に属すと推される。Ⅰ－E′－3層からは未成獣の犬の遺存骨－上腕骨？1個と大腿骨(R)－が採集されている。

Ⅰ－D－3層より出土した家犬の骨格は次の通りである。

下顎骨(L)－全長12.2、上腕骨(R)・橈骨(R)・尺骨(R)・寛骨(L)・大腿骨(L)・指骨2個、脊椎骨1個。

鳥　類

1．キ　ジ

a)脛　骨(L)：Ⅰ－D－3層およびⅠ－E′－3層から完形で各一点ずつ出土。

b)上腕骨(R)：Ⅰ－E′－3層より1個出土。

2．カラス類

a)尺　骨(L)：Ⅰ－E′－3層より1個出土。

門前貝塚より採集された動物遺存体は、以上に記載したとおりである。

合計28種（総計では48種）の遺存体は決して多いものではないが、本貝塚の立地環境を如実に反映した様相を示しており、生業活動の内容を十分把握することができる。

貝塚の北西には北上山地に連なる箱根山（446m）がある。その山裾に形成された低平な舌状台地上に、貝塚は営まれている。西方に目をやると、小友浦を介して広田湾が望まれる。東方には唯出浜が広がり、その先に門之浜・大野の両湾がある。まさに漁撈活動には絶好の立地環境といえよう。

地図に目をやると、往時、貝塚の周辺には「内湾－干潟」と「外湾－荒磯」というまったく異なった水域環境の展開していたことが、容易に想像される。採集された動物遺存体の様相は、この想定をうらづける顕著な出土傾向を示している。

すなわち、(イガイ)・マガキ・小形巻貝類の積極的な採捕活動は、貝塚の周辺に典型的に発達した岩礁性海岸の存在を示唆し、アサリ・オオノガイなどの二枚貝類は、貝塚が干潮時

に干潟を形成する、比較的波静かな内湾にも面して立地していたことを推測させる。岩礁地帯に好んで棲息する（カサゴ類）や大型のマダイが捕獲され、これにマグロ・ブリなどの外洋性廻遊魚・イルカ類が伴出し、加えて内湾魚のスズキや（エイ類）の検出されていることは、上述のような水域環境の想定とも一致しよう。

代表的内湾魚とされる「クロダイ」はまったく検出されていない。スズキの出土も稀である。干潟に多棲する貝類の採捕量もアサリを除き貧弱であった。こうした動物遺存体の特徴的な様相は、直接外洋に連絡する広田湾奥の、狭く深い小友浦に面して貝塚が立地しているために、〝浅海〟と〝干潟〟の広がる内湾的水域環境が十分形成されにくかったことを、容易に想像させる。

以上のような海棲動物遺存体の様相から、門前貝塚の人々は、小友浦・門之浜・大野の旧湾に広がる岩礁地帯を主要な生活舞台とし、マガキ・イガイ等の「岩礁性貝類の採捕」と「マダイ・マグロ漁」を中心とした、頗る活発な漁撈活動を展開していたと思われる。小友浦の小規模な干潟は、副次的な役割を果していたにすぎないであろう。また、外洋に連なる広田湾方面が、どの程度漁場として開発されていたのか興味が持たれる。総じて、本貝塚の外湾的性格が強く伺われ、他の三陸沿岸諸貝塚に共通した特徴を示していると言える。採集された骨角器類の様相からも、同様の傾向性が確認される。

哺乳類および鳥類の出土量はきわめて貧弱な様相を示している。

シカやイノシシの遺存骨の少ないことは、背後に山地を控えているだけに不思議である。前回の調査では埋葬犬が２体出土しているが、今回も２体余？の出土をみた。小獣の出土は僅かで、タヌキ・ノウサギの２種を検出したにとどまる。鳥類の出土は稀であった。カラスとキジが確認されている。海鳥の出土をみないことは注目されてよい。同様の立地傾向を示す他の貝塚との比較検討が必要となろう。

### 第２節　骨角器・貝製品

今回の発掘調査によって、合計15点の良好な骨角器類が採集された。その内訳は骨ベラ４、有孔骨針１、刺突具７、釣針２、垂飾１である。

以下、個々の資料について必要な事項を記載し、実測図を参照しながら説明を加えていくことにする（第23図～第25図）。

#### (1)　骨ベラ

１．実測図Ⅰ－１：Ⅰ－E′－３層出土。

Ⅰ－１－ａ：材料撰択部位・使用痕を示す。

Ⅰ－１－ｂ：ヘラの表側。切断箇所（矢印）と使用痕を示す。

シカの中手骨(Ｒ)近位端・内側が原材料として撰択されている。ヘラの先端を僅に欠損する。現存長は9.3cmを測る。

本例のような骨ベラは次のような順序で製作されたと推察される。

①　中手骨の前面（Ⅰ－１－ａ）と背面（Ⅰ－１－ｂの左側）の双方からＶ字状に鋭く溝

を切り込む。（擦切技法）

② 原材料を骨体から採取するために関接面を斧などで截断する。（截断技法）

③ 骨体から採取した材料の先端部を、ヘラ状に入念な研磨を施して完成する。

この技法によって製作された骨ベラは、断面がU字状を呈し、〝そり〟の伴った幅広い丈夫な器体をなすことが大きな特徴として指摘される。骨ベラとして最も理想的な形態と強さを備えていると言えよう。以上のような骨ベラの製作方法を説明上の都合から、仮に「A技法」と呼ぶことにする。

2．実測図Ⅰ－2：Ⅰ－E′－3層出土。

Ⅰ－2－a：ヘラの裏側。顕著な縦方向につく使用痕と異常な骨増殖の位置（矢印・2－a）を示す。

Ⅰ－2－b：ヘラの右側面。矢印で示した位置に、Ⅰ－1－a例と同様のやや太い切り込み溝がある。同一技法による製作を示唆すると思われる。

Ⅰ－2－c：ヘラの表側。先端が厚く、そこに使用痕が集中している。矢印は擦切技法の明瞭な痕跡を示す。

シカの中手骨(R)近位端・内側が、原材料として撰択されていると推察される資料で、Ⅰ－1例と同一の技法が用いられている。また、骨増殖のある異常骨が骨器の原材料とされていることは珍しく、興味深い例として指摘されよう。

3．実測図Ⅰ－3：Ⅰ－D′－3層出土。

Ⅰ－3－a：ヘラの裏側。縦位の明瞭な使用痕をとどめる。

Ⅰ－3－b：ヘラの表側。矢印の範囲に明瞭な擦切技法の痕跡が認められる。反対側には数度に及ぶ截断跡が認められるが、上記の2例のような擦切痕は全くない。

Ⅰ－3－c：ヘラの左側面。矢印は擦切られた位置を示す。

Ⅰ－3－d：材料の選択部位を示す。

シカの中手骨(L)近位端・内側を原材料として選択・製作している例。唯一の完形品で全長8.5㎝を測る。製作技法はⅠ－1・2例とやや異なっている。本例は、次に示すような順序で製作されたと推察される。

① 中手骨の前面（Ⅰ－3－C）にのみV字状の溝を鋭く切り込む。（擦切技法）

② 切り込んだ溝に沿い、中手骨を大きく左右に截断する。（截断工程Ⅰ）

③ こうして採取された中手骨内側をさらに截断し、骨体の背面に残された関接部を取り去る。（截断工程Ⅱ）

④ 骨体から採取した原材料をヘラ状に研磨して完成する。

この技法は、背面からの面倒な擦切作業を、截断によって省略する意図から生み出されたものと推察される。　短時間の間に労少なくして骨ベラの製作が可能な点秀れているが、反面截断技術の優劣・割れ方の偶然性などによって骨ベラの形態が大きく左右され、材料の無駄も多いなどの欠点が指摘される。

かかる技法を用いて製作された骨ベラは、Ⅰ－1例などに較べると器幅が狭くなり、器体の片側が必ず湾曲するという特徴を持つ。

こうした骨ベラの製作方法を説明上の便宜から、仮に「B技法」と呼ぶことにしよう。前回の調査（昭和29年）でも、この技法を用いた骨ベラが出土しているようである。

4．実測図Ⅱ－1：Ⅰ－D′－3層出土。

Ⅱ－1－a：ヘラの裏側。材料の選択部位と使用痕を示す。

Ⅱ－1－b：ヘラの右側面。顕著な縦位の使用痕が認められる。

Ⅱ－1－c：ヘラの表側。僅かな使用痕を先端にとどめる。

シカの中手骨(L)近位端・内側を原材料として選択している。現存長7.2cmを測る。本例には擦切技法の痕跡がまったく認められず、截断痕だけが明瞭に残されている。このことは、骨ベラ製作に擦切技法を伴なわない、截断技術だけを用いた粗雑な第3の技法の存在を予想させる。これを仮に「C技法」と呼ぼう。

「C技法」の最大の特徴は、一定の製作順序を持たないことにある。つまり、中手骨をどこから、どのように截断して骨ベラを製作しても、一向に構わないのである。ヘラの形態的な特徴としては、関接を基部として残さないことが指摘される。おそらくは柄に着装して用いられたのであろう。

**(2) 有孔骨針**

1．実測図Ⅱ－2：Ⅰ－E′－3層出土。

Ⅱ－2－a：材料の選択部位を示す。

Ⅱ－2－b：骨針の原位置における形状を示す。

Ⅱ－2－C：右側面を示す。

シカの中手骨(R)近位端・外側を材料として選択している。先端の針部を欠損、現存長7.6を測る。関接面に穿孔された穴は径0.5を計り、内側では0.2の大きさになっている。

Ⅱ－1例と同様に中手骨の背面を利用している点が注目される。全体に良く調整研磨されており、製作技法の復元は難しい。

**(3) 刺　突　具**

1．実測図Ⅲ－1：Ⅰ－E′－3層出土。

Ⅲ－1－a：裏側を示す。

Ⅲ－1－b：表側を示す。

イノシシの腓骨(R)遠位端を利用して製作されている。採集された唯一の完形刺突具。全長11.5cmを測る。Ⅲ－3例に較べ、器体の研磨はそれほど入念に行なわれていない。腓骨の自然湾曲はそのまま残されている。しかし、先端部は鋭く研磨されている。

2．実測図Ⅲ－2：Ⅰ－F′－3層。

Ⅲ－2－a：裏側を示す。

Ⅲ－2－b：表側を示す。

イノシシの腓骨(R)遠位端を利用して製作されている。Ⅲ－2例に較べ良く研磨されており、腓骨の自然湾曲は見事に矯正されている。先端はやはり鋭く作出されており、器体には縦位の明瞭な研磨痕をとどめている。基部を欠失しているが、採集された刺突具の中では最も大きく、現存長で10.8cm、推定では12cmに達する。

3．実測図Ⅲ－3：Ⅰ－E′－3層出土。

Ⅲ－3－a：表側を示す。

Ⅲ－3－b：裏側を示す。

イノシシの腓骨(L)遠位端を利用して製作されている。基部を欠失し、現存長7.7cmを測る。3例中最も入念に研磨されており、一見しただけでは、腓骨製であるかどうか判断が難しいほどである。腓骨の自然湾曲は完全に矯成されている。

4．実測図Ⅲ－4：Ⅰ－F′－3層出土。

マグロの脊椎骨棘を利用して製作された粗製刺突具。先端と基部を欠損する。現存長は8.9cmを測る。本例などは果して単独で使用されたのかどうか疑問である。先端に明瞭な調整痕をとどめている。

5．実測図Ⅲ－5：Ⅰ－E′－3層。

Ⅲ－5－a：器体の裏側を示す。

Ⅲ－5－b：器体の表側を示す。

シカの中足骨もしくは中手骨を細長く截断し、これを簡単に研磨して製作された粗製刺突具。基部を欠き、現存長は5.4cmを測る。

6．実測図Ⅲ－6：Ⅰ－？－3層出土。

Ⅲ－6－a：器体の裏側。基部に細い縦位の研磨痕とアスファルトの付着が認められる。

Ⅲ－6－b：器体の表側。欠失した部分に磨耗が認められる。

シカの中足骨もしくは中手骨製の刺突具。全体に良く研磨されている。現存長は4cmを測る。

7．実測図Ⅲ－7：Ⅰ－G′－3層出土。

シカの中足・手骨のいずれかを利用した粗製尖頭器と推定される資料。先端の研磨が弱く骨器かどうか疑わしい。現存長6.6cmを測る。

**(4) 釣　　針**

1．実測図Ⅲ－8：Ⅰ－E′－3層出土。

Ⅲ－8－a：釣針の裏側。湾曲部に鹿角の海綿質が僅かに遺存している。

Ⅲ－8－b：釣針の右側面。鈎部は左側に湾曲する。

Ⅲ－8－c：釣針の表側（正面観）。軸幹左側に、鹿角の自然面の遺存する状態を示す。湾曲部に顕著な調整痕が認められる。

Ⅲ－8－d：釣針の左側面。鹿角自然面を示す。

無鈎の鹿角製釣針。軸長4.2cmを測る完形品。軸頂は栗の形に丸く整形され、その下に数

条の浅い溝が不規則に施されている。軸幹は真直ぐで、ほぼ一定の太さを保ち、やがてU字状に湾曲し、そのまま鈎部が鋭く伸びきっている。全体にどことなくぎこちなく、稚拙なつくりだが、軸幹にねばり強さを感じさせる資料である。

2．実測図Ⅲ－9：Ⅰ－E′－3層出土。

Ⅲ－9－a：釣針の裏側。軸幹の左側に細かい研磨痕が認められる。

Ⅲ－9－b：釣針の表側（正面観）。軸幹右側に細かい研磨痕をとどめる。全体が緻密質で被れている。

Ⅲ－9－c：右側面。軸項右側に剝脱痕。鈎部は右側に傾いていたと推察される。

鹿角製小形釣針。破損品で、推定軸長3.1cmを測る。軸項は内側に曲がり、その形は鳥の嘴状に整形され、その口先と首元にあたるところに浅い溝が施されている。軸幹は中程で軽く湾曲し、やがてU字部に移行するあたりで欠損している。保存状態が悪く、一部に剝脱が認められた。矢印の部位に海綿質の遺存が確認された。本例は、Ⅲ－8例に較べ小さく華奢なつくりであるが、外鈎を持つ精巧な小形釣針であったと推定される。

○加工骨の断片

実測図Ⅱ－3：Ⅰ－F′－3層出土。

シカの中足骨(R)遠位端を擦り切った断片骨。中足骨利用の骨器が確認されなかったので、参考に示した。

**(5) 貝製垂飾品**

1．実測図Ⅲ－10：Ⅰ－E′－3層出土。

ベンケイ貝製の精巧な垂飾。両端に孔を有する形態と推されるが、だが、右側を欠損している。推定全長は6.5cmを測る。

採集された生産具は、骨ベラ・刺突具・釣針の三者を、その基本的な組成としている。

なかでも、刺突具類は最も豊富に発見され、合計7点を数える。製作に使用された材料も、イノシシの腓骨・マグロの脊椎骨棘・シカの中足(手)骨などバラエティーに富み、刺突具製作の盛行ぶりを思わせる。こうした選択材料・形態の変化は、刺突具の着装法と対象とされた動物相の相違によるのであろう。

骨ベラは、刺突具についで多く検出され、計4点を数える。A・B・C3種の技法を用いて製作されていることが確認された。このような多様な技法の存在は、骨ベラの需要が高く、盛んに製作しなければならない事情があったことに起因するのであろう。貝塚人が骨ベラの製作に傾けた、なみなみならぬ努力と工夫の跡が伺われる。

前回の調査でも、A・Bの両技法によって製作された骨ベラが多数出土している。豊富な骨ベラの出土量は、その生産用具としての重要性を示唆するものと理解されよう。

鹿角製の釣針は、大小二様の異なった形態を持つ資料が採集されている。無鈎の中形品(軸長4.2cm）と、本来外鈎のついていたと推される小形品（軸長3.1cm）の2例である。

前回の調査でも、表採品を含めて６点の各種釣針が採集されており、本貝塚における釣針製作の盛行ぶりが伺われる。

両例とも鹿角の角幹を擦切截断し、採取した矩形の角片を丁寧に抉り込んで、釣針を作り出していると推察される。これら三種の生産具に認められた様相は、採集された動物遺存体との関係から、いずれも門前貝塚人の旺盛な海への適応姿勢を示唆すると思われる。

骨ベラは、マガキ、イガイなどの岩礁性貝類の採捕活動に用いられ、釣針・刺突具類は、マグロ・マダイ・スズキなどを対象として製作されていたと推定される。

以上、採集された資料からは、門前貝塚の人々が、貝塚の周辺に広がる外湾的水域環境に積極的な適応姿勢を示し、骨角製の生産用具を盛んに製作した事情を伺うことができる。こうした生産具に認められた様相は、三陸沿岸に立地した諸貝塚に共通した性格を示している。

（柳沢清一・金子浩昌）

## 参 考 文 献

引用・参照した文献のうち主なものを列記した。順序不同である。


吉田義昭「門前貝塚」（郷土資料館報告）盛岡市公民館（昭35）

及川洵・小野寺信吾・遠藤勝博「堂の前貝塚」陸前高田市教育委員会（昭47）

西村正衛「蛸之浦貝塚」（社教シリーズ第11集）大船渡市教育委員会（昭33）

草間俊一・及川洵・高橋信雄他「長谷堂貝塚」岩手県教育委員会（昭47）

吉田義昭・東登「宮野貝塚」三陸村役場、三陸村教育委員会（昭37）

草間俊一・金子浩昌編「貝鳥貝塚」花泉町教育委員会（昭47）

草間俊一編「崎山弁天遺跡」大槌町教育委員会（昭49）

草間俊一、伊藤鉄夫、及川二夫、菊池郁雄「水沢の原始・古代遺跡」水沢市教育委員会（昭40）

鈴木孝志・山口興典・岡本孝之・鈴木道之助・遠藤輝夫「北上市稲瀬町樺山遺跡緊急調査報告」北上市教育委員会（昭43）

宮城県鼎が浦高校社会班「本吉郡唐桑町藤浜遺跡、古館貝塚発掘調査報告」（昭43）

後藤勝彦「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」考古学雑誌48の1

伊東信雄「宮城県古代史」（宮城県史１）（昭32）

今井富士雄・磯崎正彦「十腰内遺跡」（岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書）岩木山刊行会（昭42）

文化財保護委員会編「大湯町環状列石」（埋蔵文化財発掘調査報告）（昭28）

丹羽茂「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」（福島考古12）福島県考古学会（昭46）

武田宗久編「加曽利貝塚」（貝塚博物館調査資料第１集）千葉市教育委員会（昭43）

吉田格「横浜市称名寺貝塚発掘調査報告」武蔵野文化協会（昭35）

吉田格「関東の石器時代」雄山閣（昭48）

林謙作「縄文時代 東北」（日本の考古学Ⅱ）河出書房（昭40）

西村正衛「東北・関東（縄文中期文化）」（新版・考古学講座３）雄山閣（昭44）

江坂輝弥「縄文文化　東北」（日本考古学講座３）河出書房（昭31）

# あ と が き

調査の概要については、本文の中で述べたとおりである。今回の調査は道路拡幅工事で消滅する部分、すなわち道路に添った細長い部分の調査で、過去においてすでに調査されている個所もあって、決して満足した調査とはいえなかった。とくに攪乱されている部分が、盗掘されたのか正式に調査されたものなのか記録もないので、トレンチを設定して、ともかく地山まで発掘をおこなうことにした。壁面実測図でみるとおり、攪乱層で地山まで達していない個所もあった。

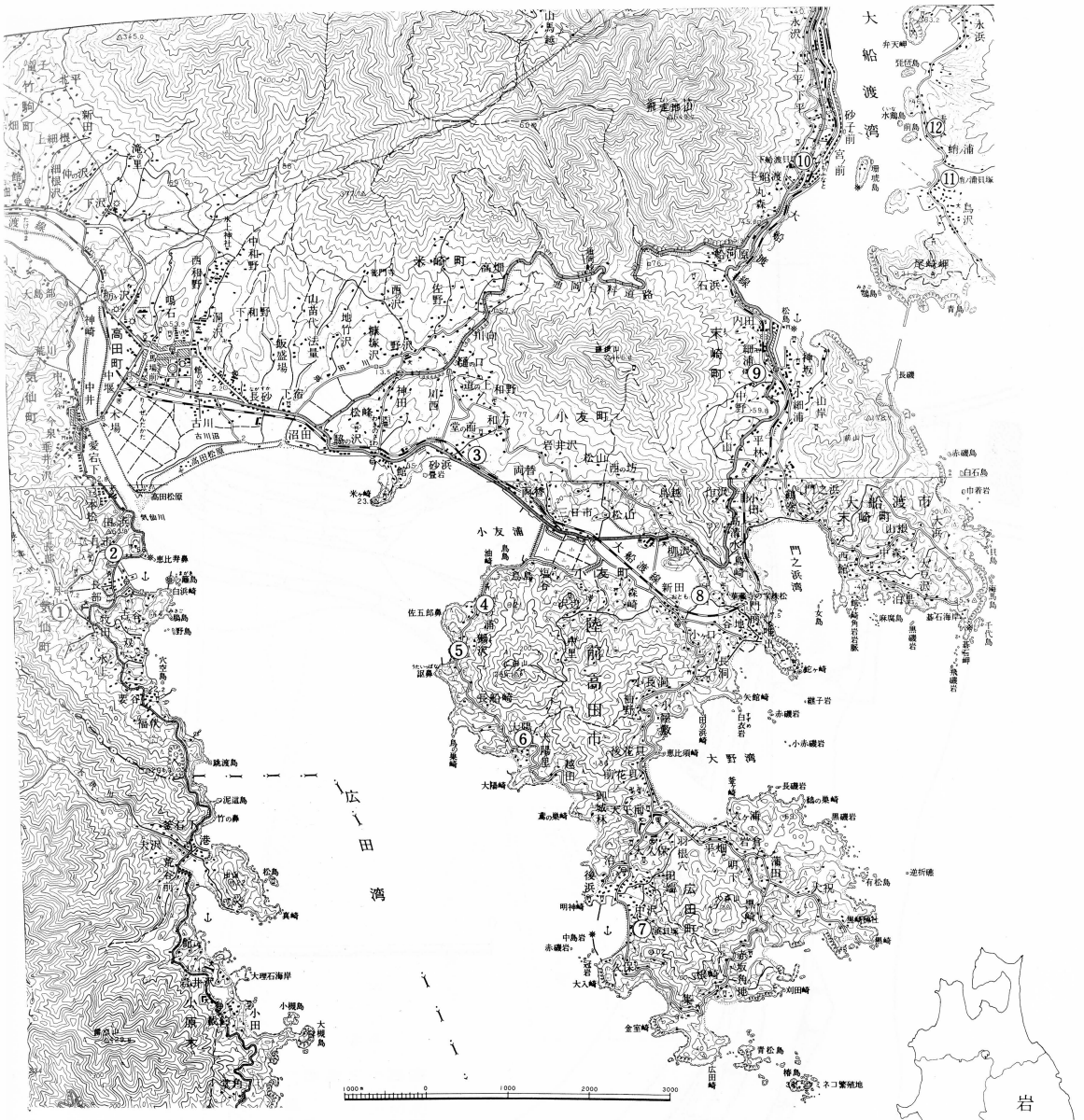
調査は短期であったが、思ったより遺物が出土し、土器においては門前式を一層あきらかにすることができた。しかし上記のように攪乱されている個所があったり、短期間の調査ということもあって、層位上の把握や伴出石器などまだまだ不明な点が残されている。さらに門前式土器のひろがりや編年的位置づけ、併行期の土器など他地域の調査研究が進まなければ解決できない点も残されている。

今回の調査で道路下の斜面に、過去の調査や盗掘から残っていた貝層が約1m幅で長さ5mほどあった。堆積状況があまり良好ではなかったが、動物遺存体の報告文が示すように、採集された遺存体は28種類で、これに昭和29年の調査資料を加えると48種になり、本貝塚の立地環境と生業活動の内容を十分把握することができたことは幸いであった。また骨角、貝器は16個も出土しており、門前貝塚人の外湾的水域環境に旺盛に適応した姿勢を示す、生産用具の製作をおこなっていた状況を伺うこともできた。このことは、今回の調査が消滅する遺跡の記録保存という埋蔵文化財に対する全く消極的な対策であるが、それにもかかわらず、今後の研究に示唆を与え、重要な資料になりえたことは、評価されるべきことと考える。

最後に、この報告書を作成するにあたって、自然遺物や骨角・貝器の整理を早稲田大学の金子浩昌氏、柳沢清一氏にお願いした。分類や図面とともに考察をも加えた精細な報告文をお送りいただき、報告書の内容を一層充実させることができた。深く感謝申し上げる次第である。

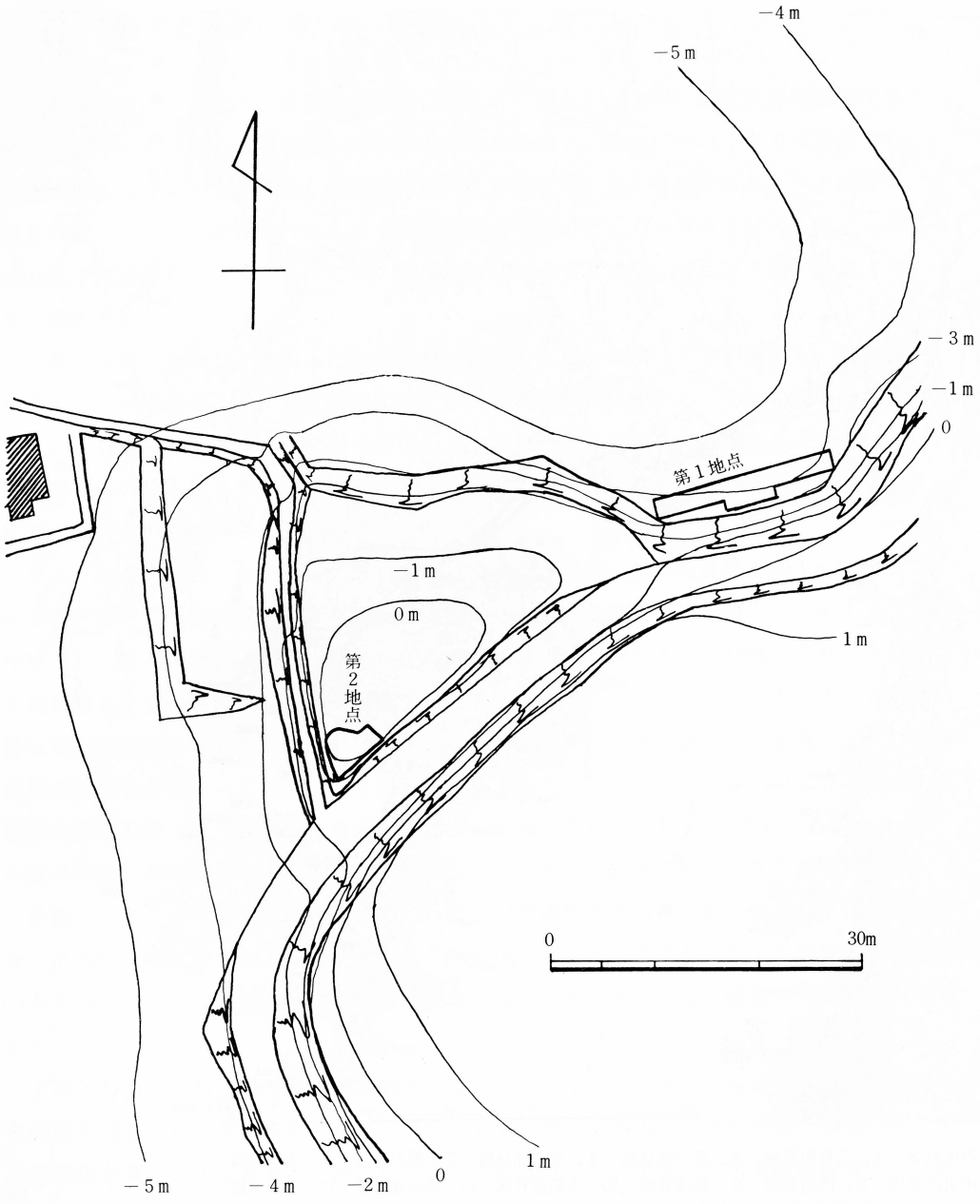
土器・石器の分類・整理は遠藤勝博氏と及川がおこなった。そして遠藤氏は土器・石器の実測図を書き、及川が拓本をとった。さらに両名が再三・再四の討議を重ね、石器の報告文を遠藤氏が書き、土器を及川が書いた。また土器洗いや復原作業は高田高校考古学同好会員や一関二高史学部員がおこなってくれた。両校の生徒諸君に感謝の意を表する次第である。

（及 川　洵）

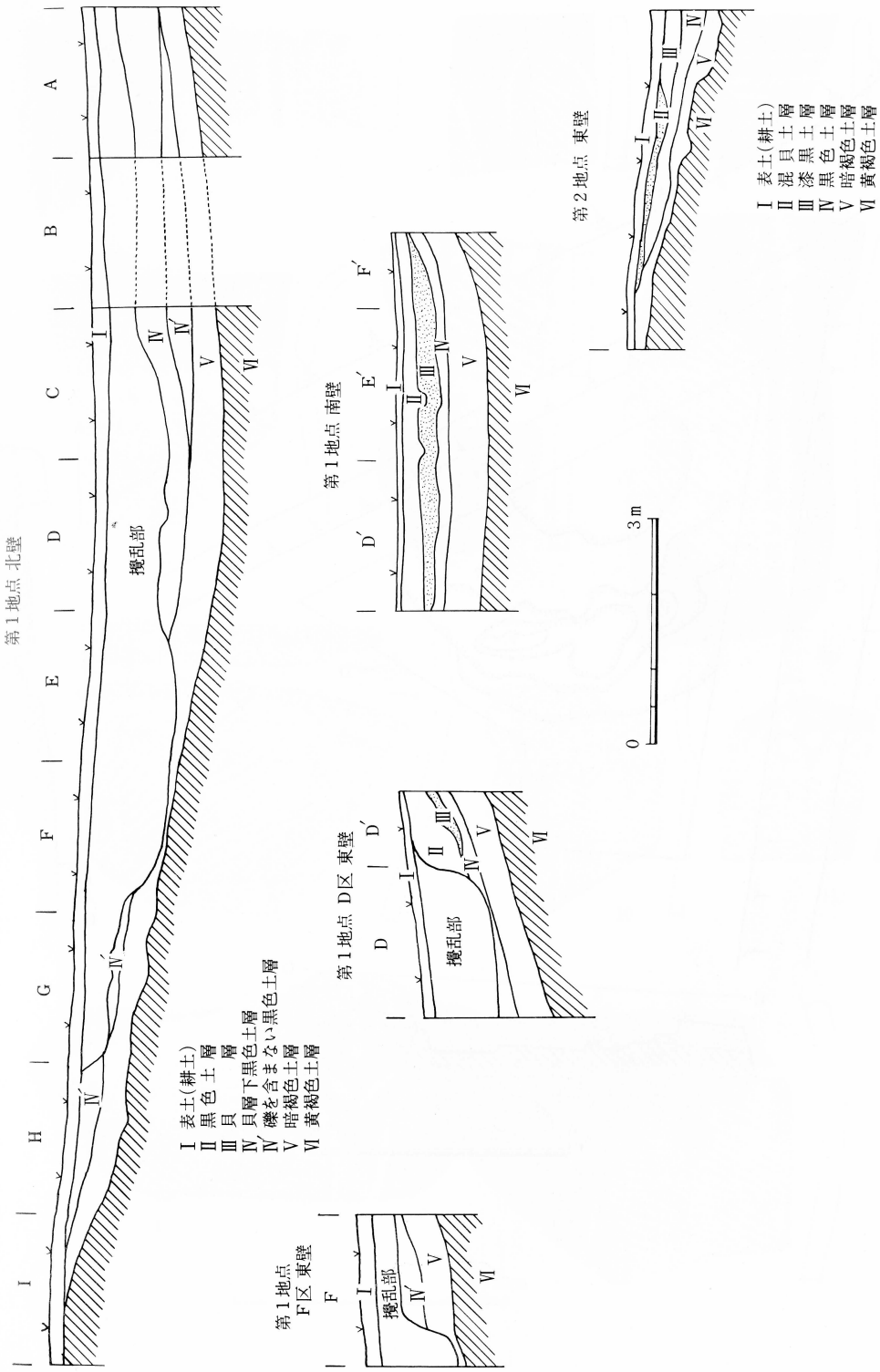


1、牧田貝塚　2、二日市貝塚　3、堂の前貝塚　4、矢の浦貝塚　5、獺沢貝塚　6、大陽貝塚
7、中沢浜貝塚　8、門前貝塚　9、細浦貝塚　10、下船渡貝塚　11、蛸の浦貝塚　12、清水貝塚

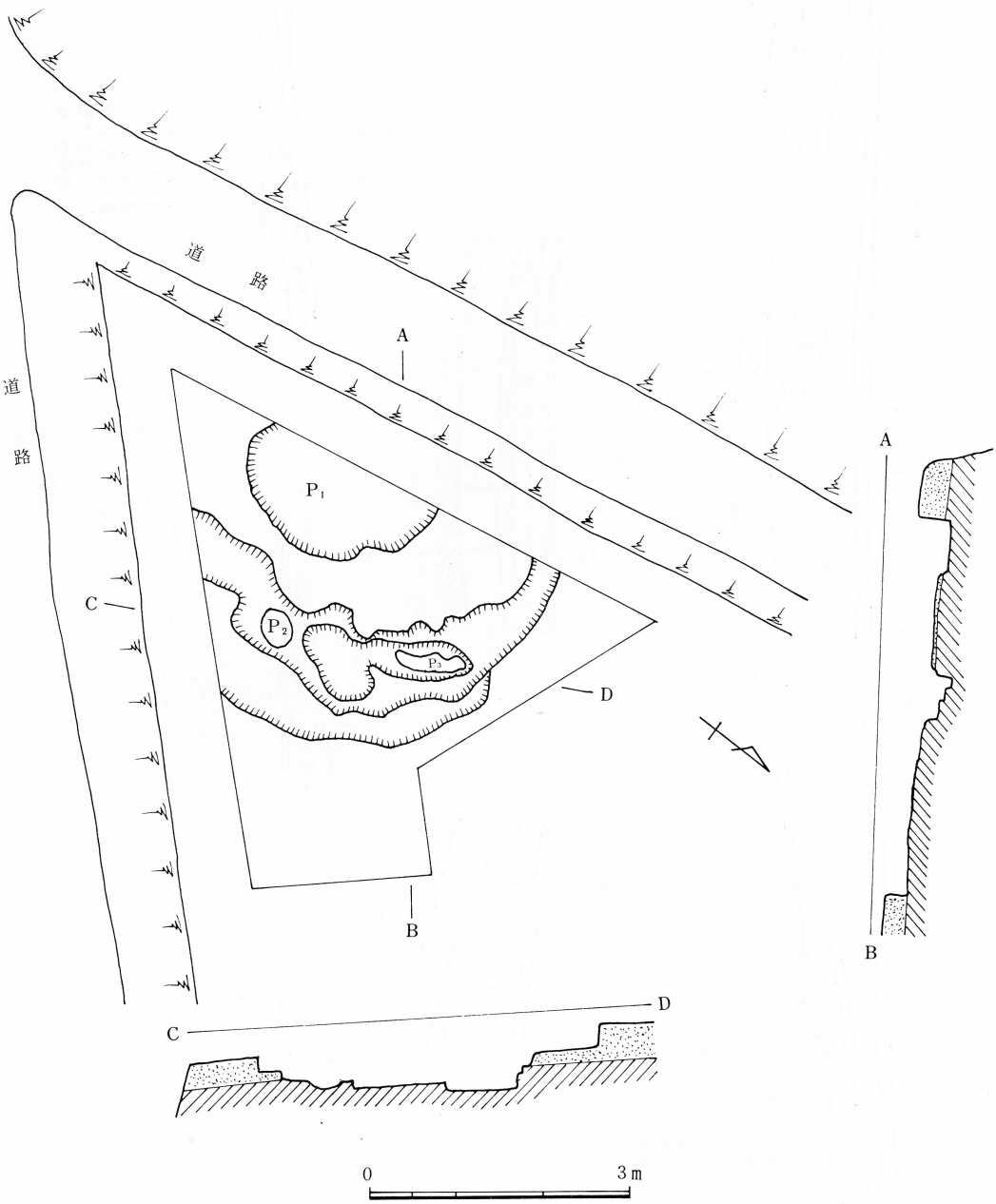
第１図　門前貝塚付近の地図（５万分の１の地形図による）



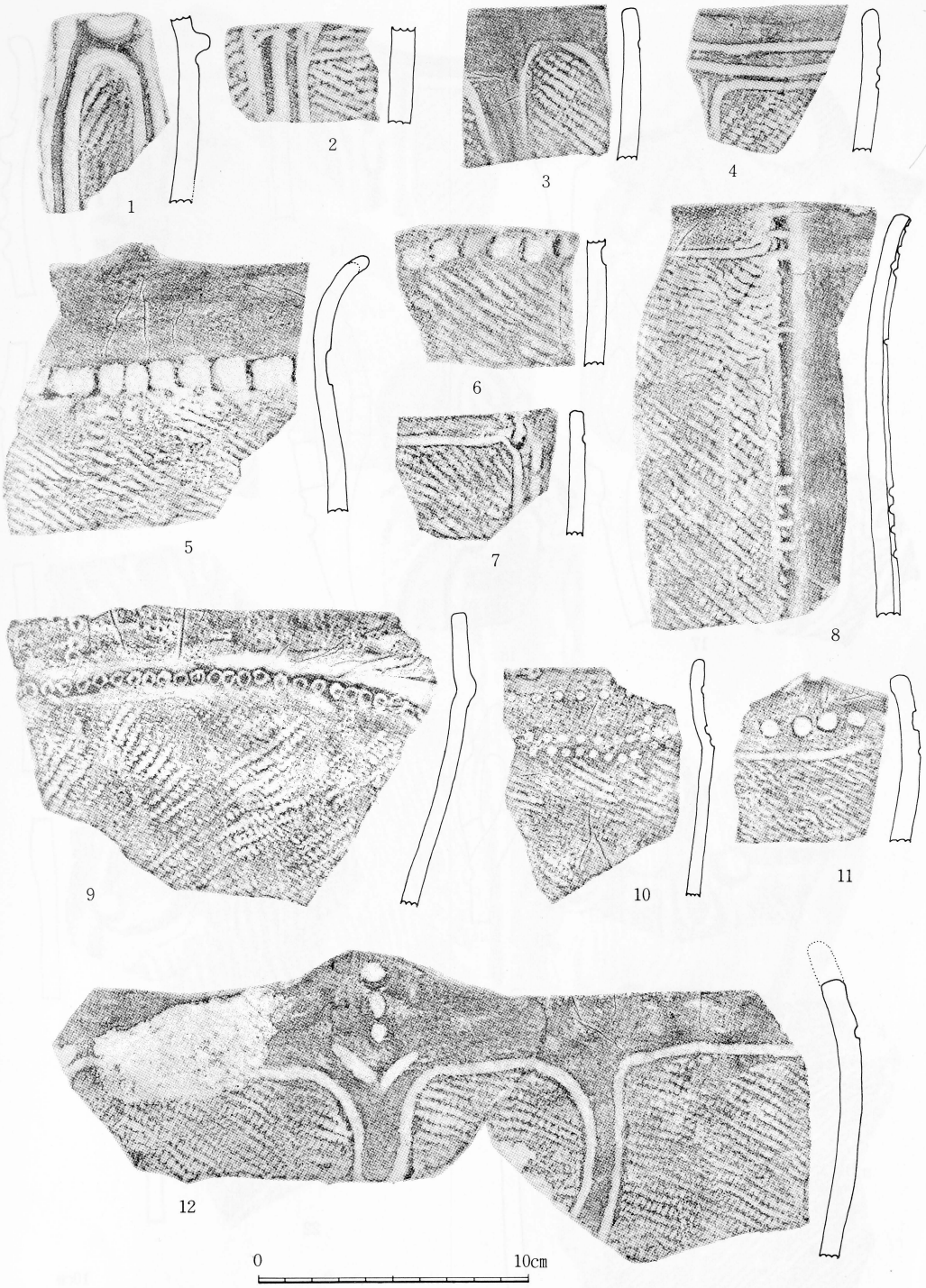

第2図　門前貝塚発掘地点付近の実測図



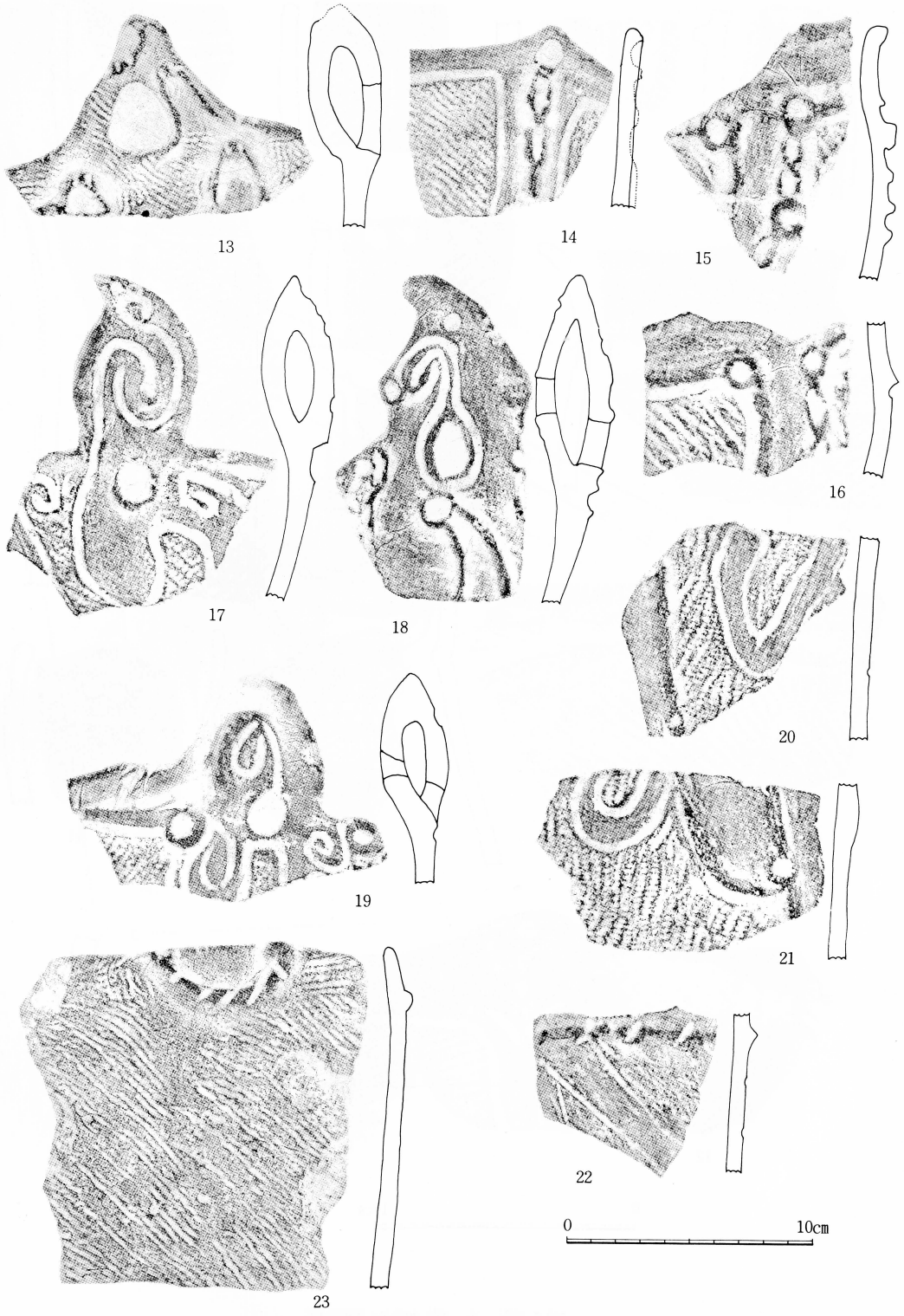

第3図　第1地点・第2地点壁面実測図



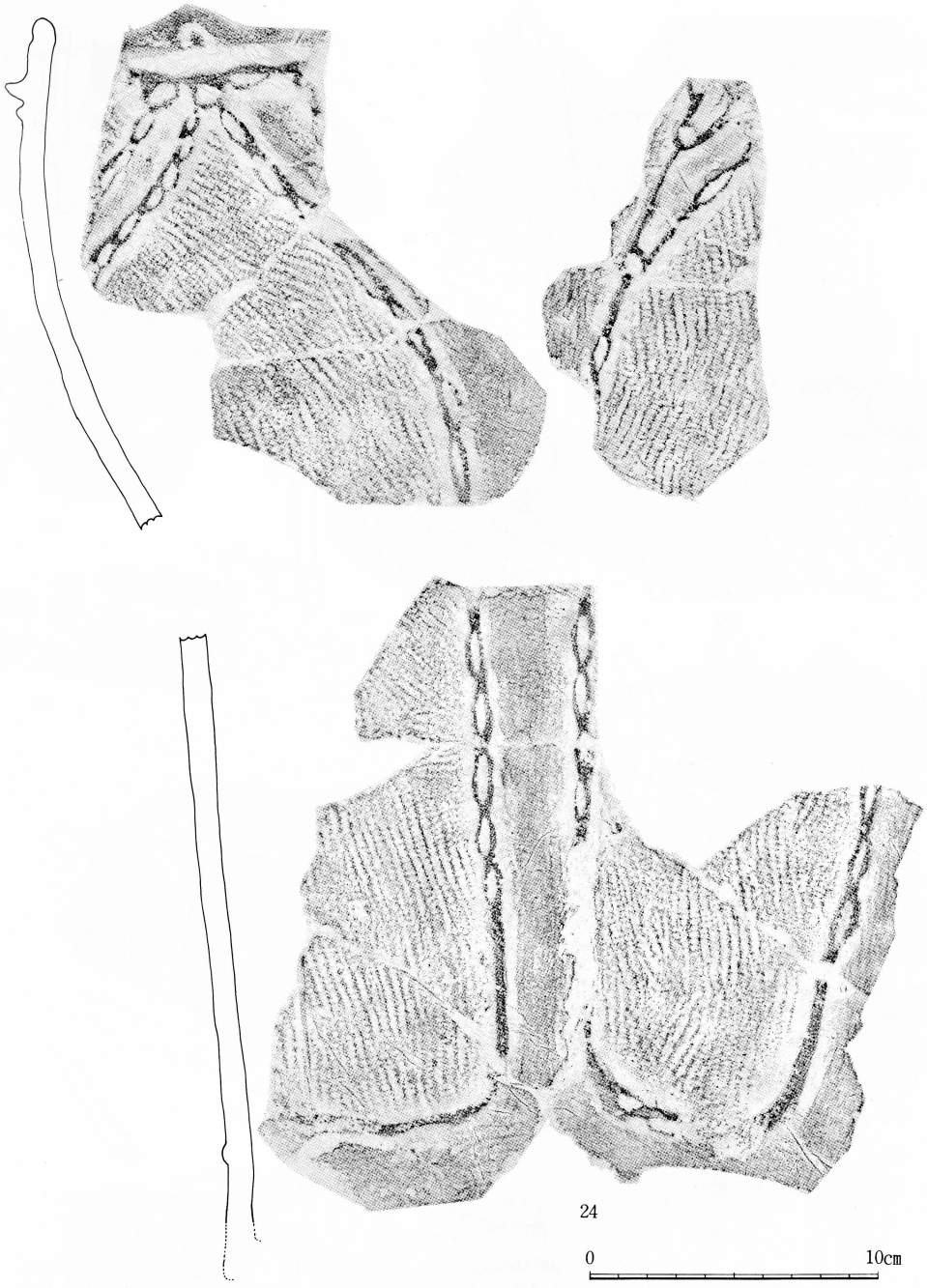

第4図 遺構実測図



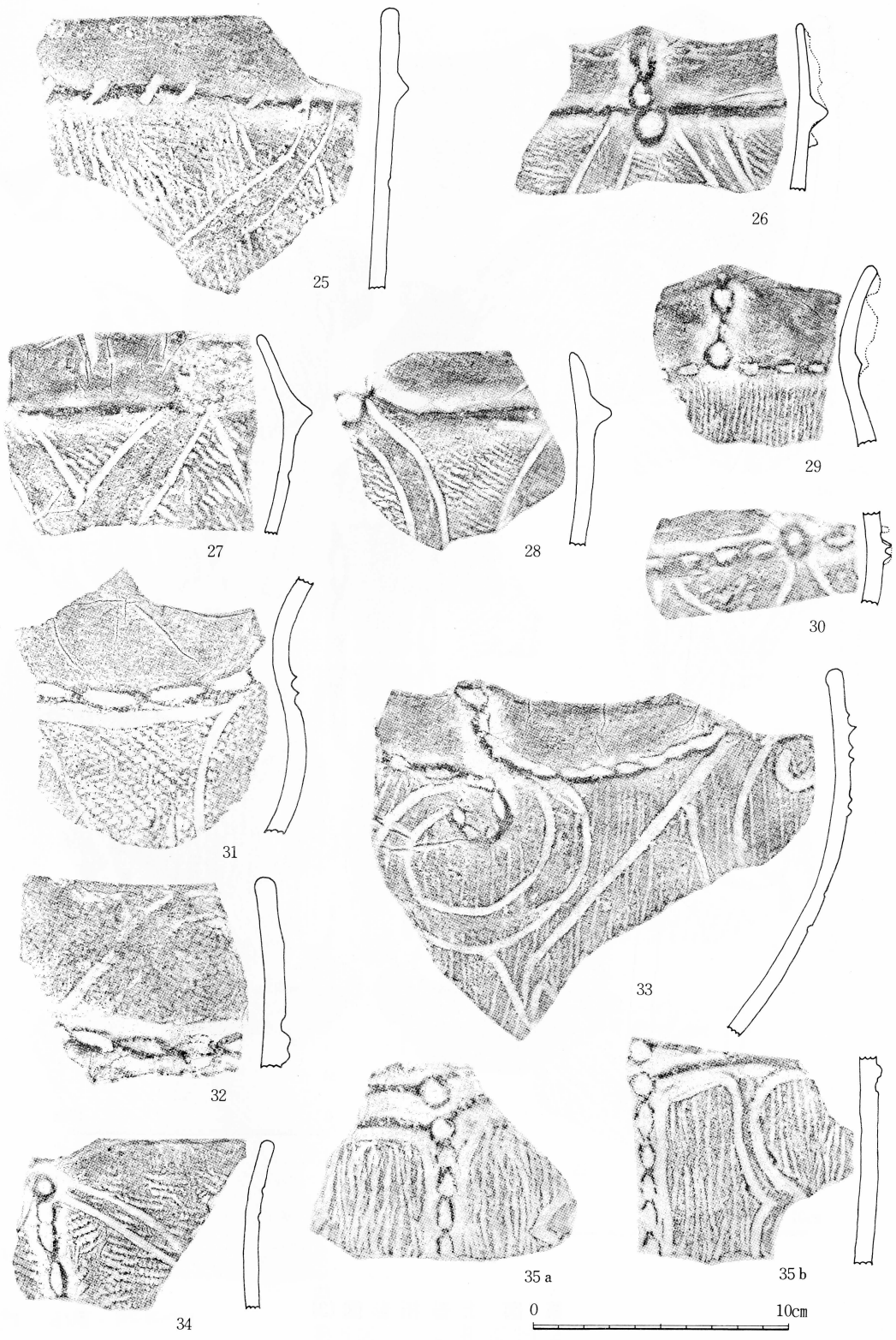

第5図　土器拓影図(1)



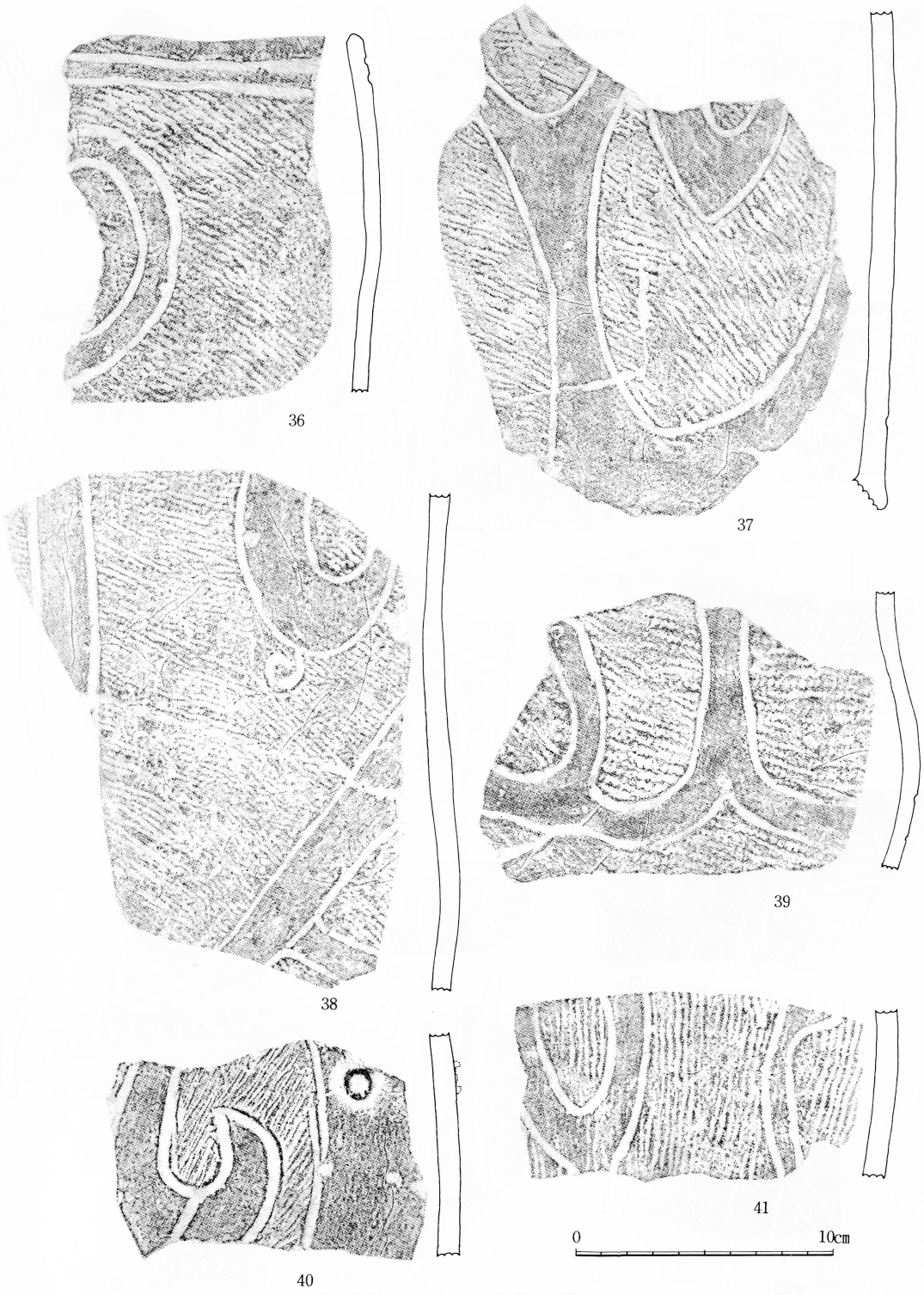

第6図　土器拓影図(2)



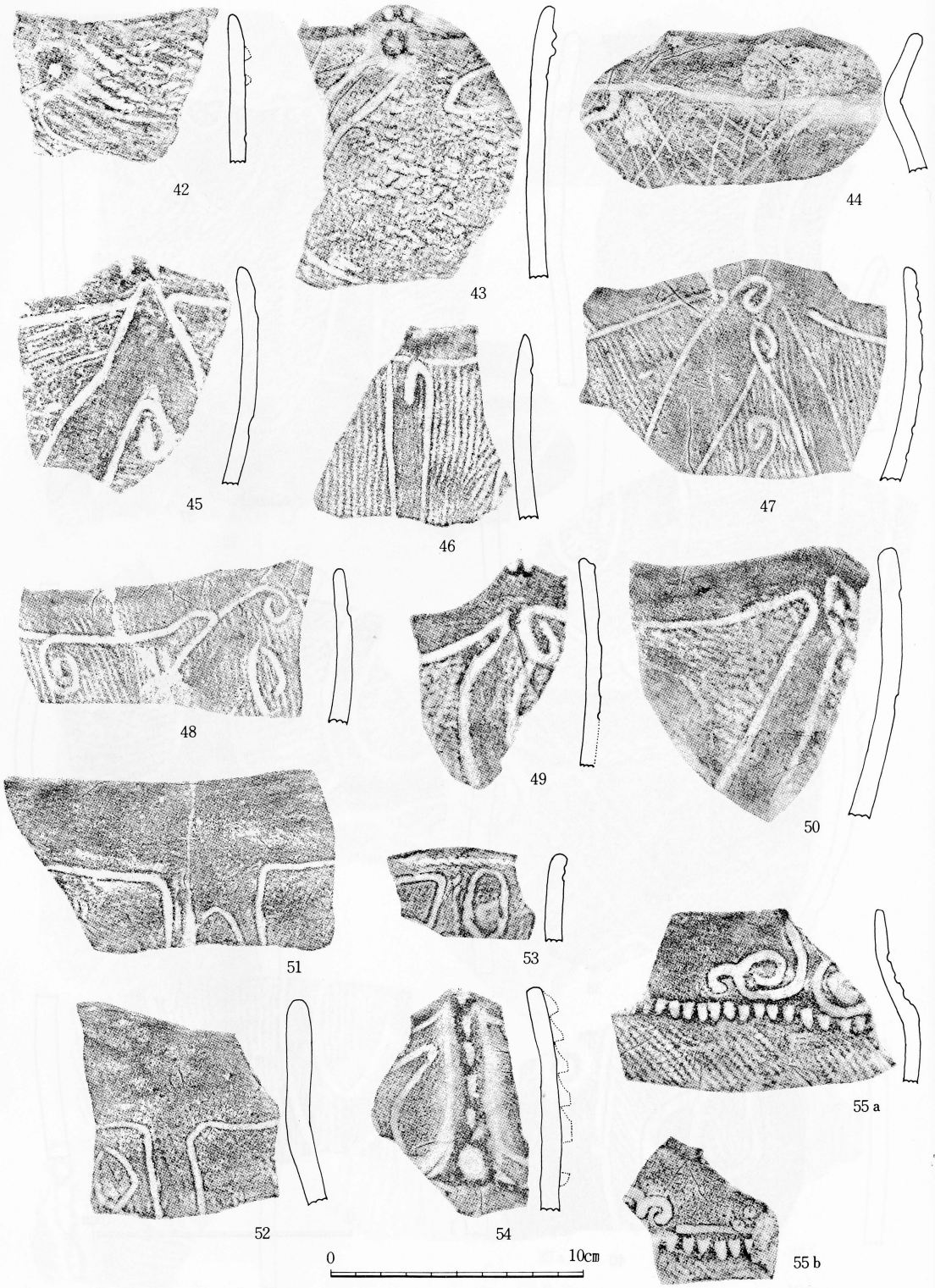

第7図　土器拓影図(3)



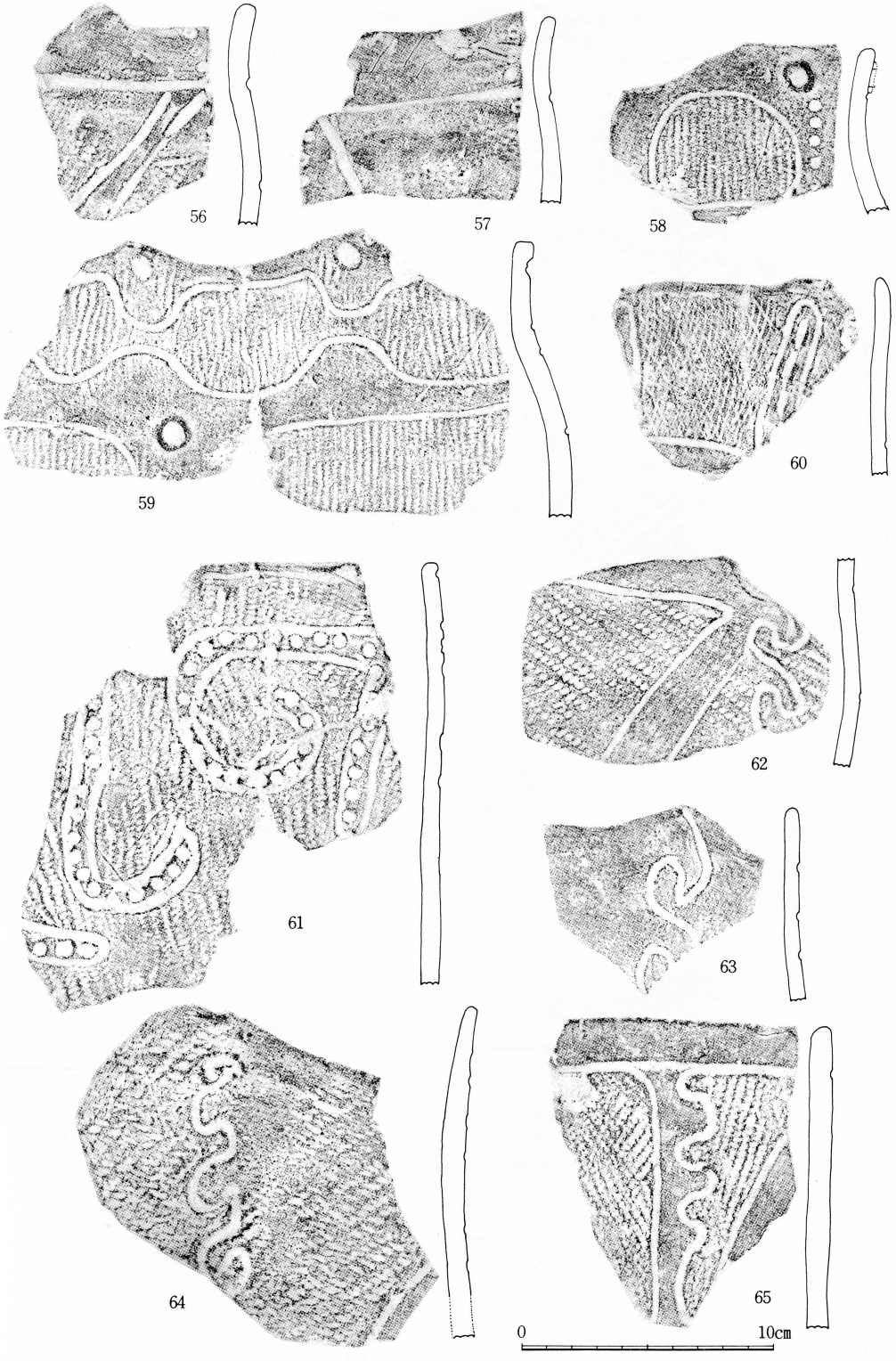

第8図　土 器 拓 影 図 (4)



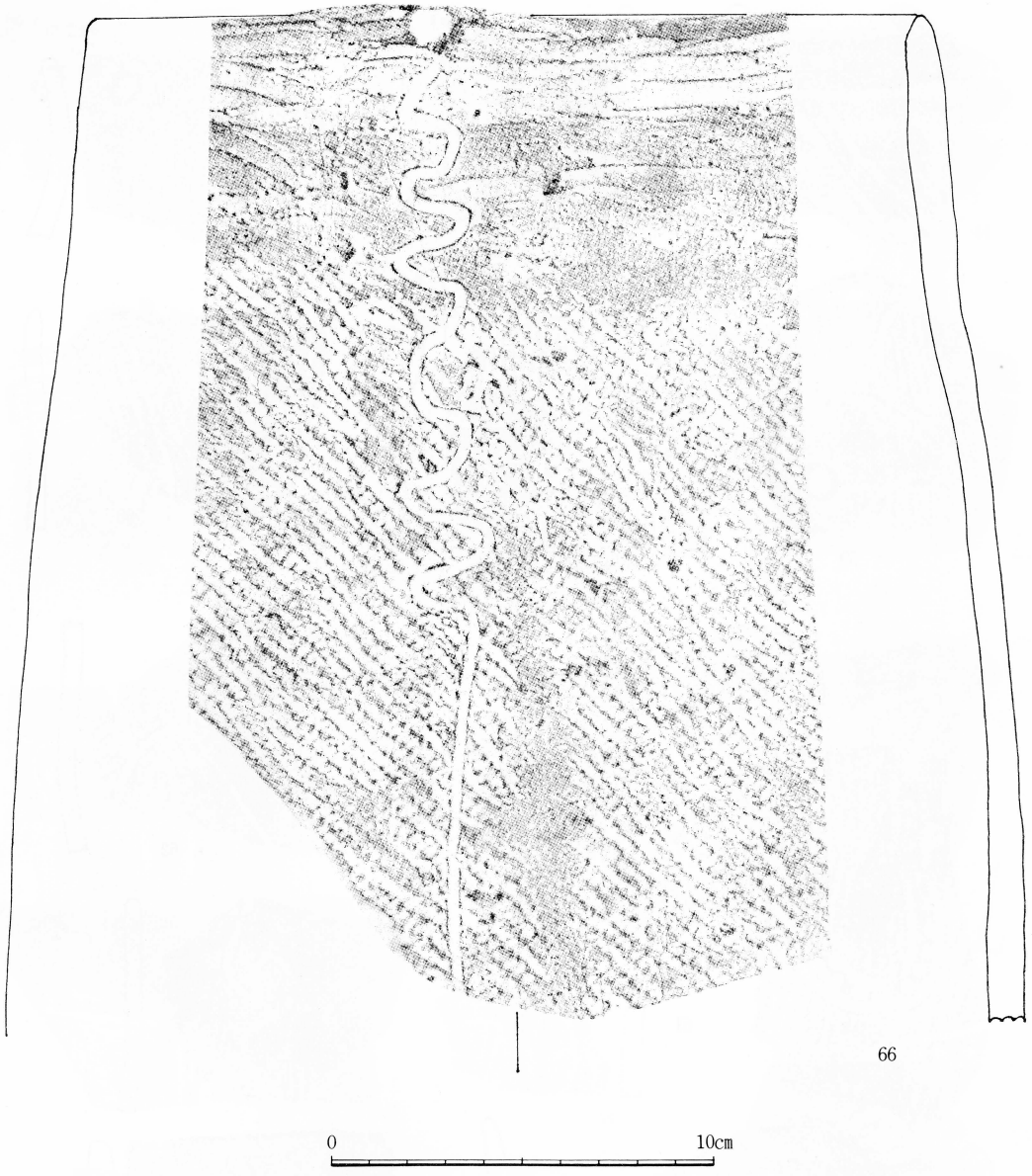

第9図　土器拓影図(5)



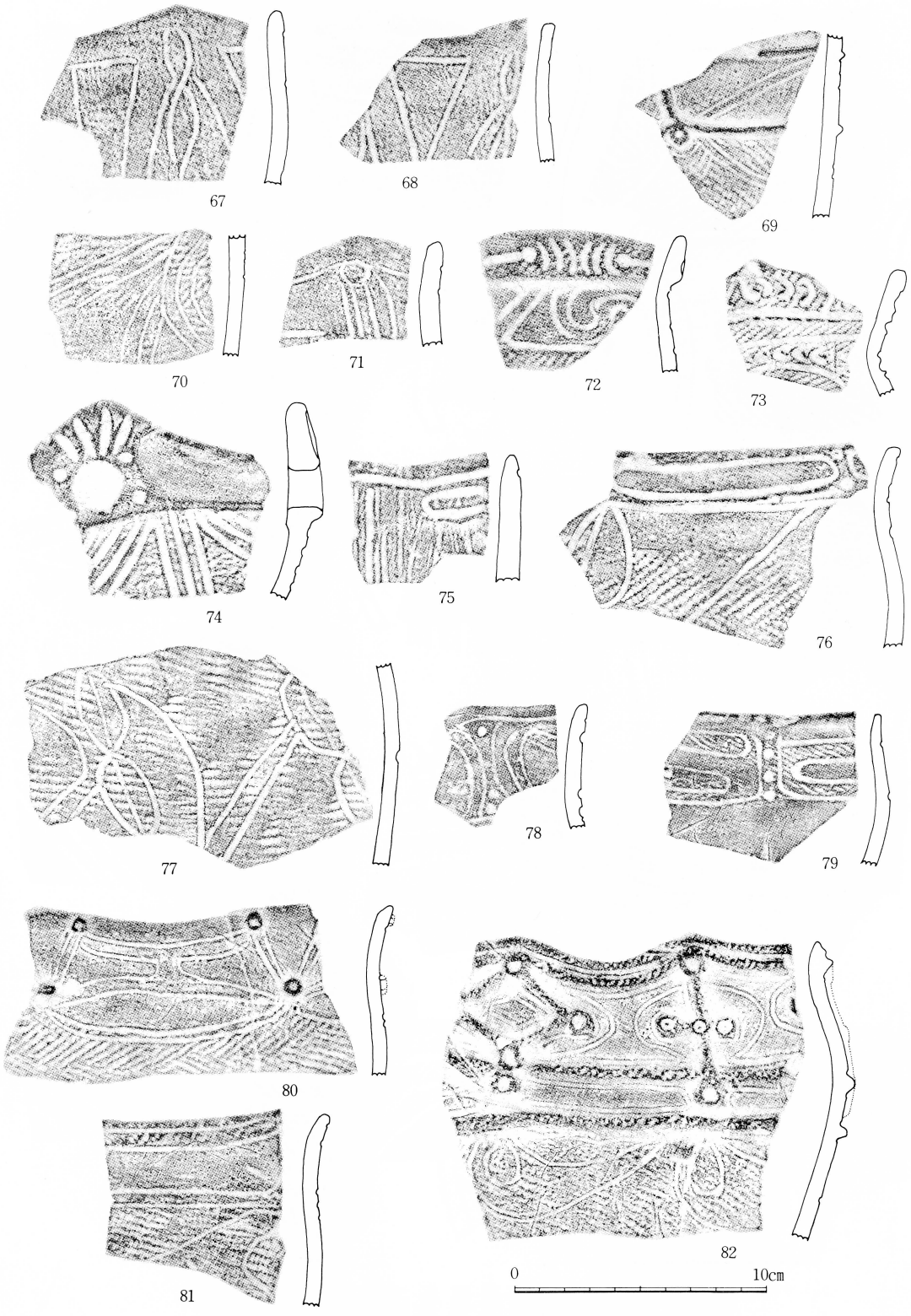

第10図　土 器 拓 影 図 (6)



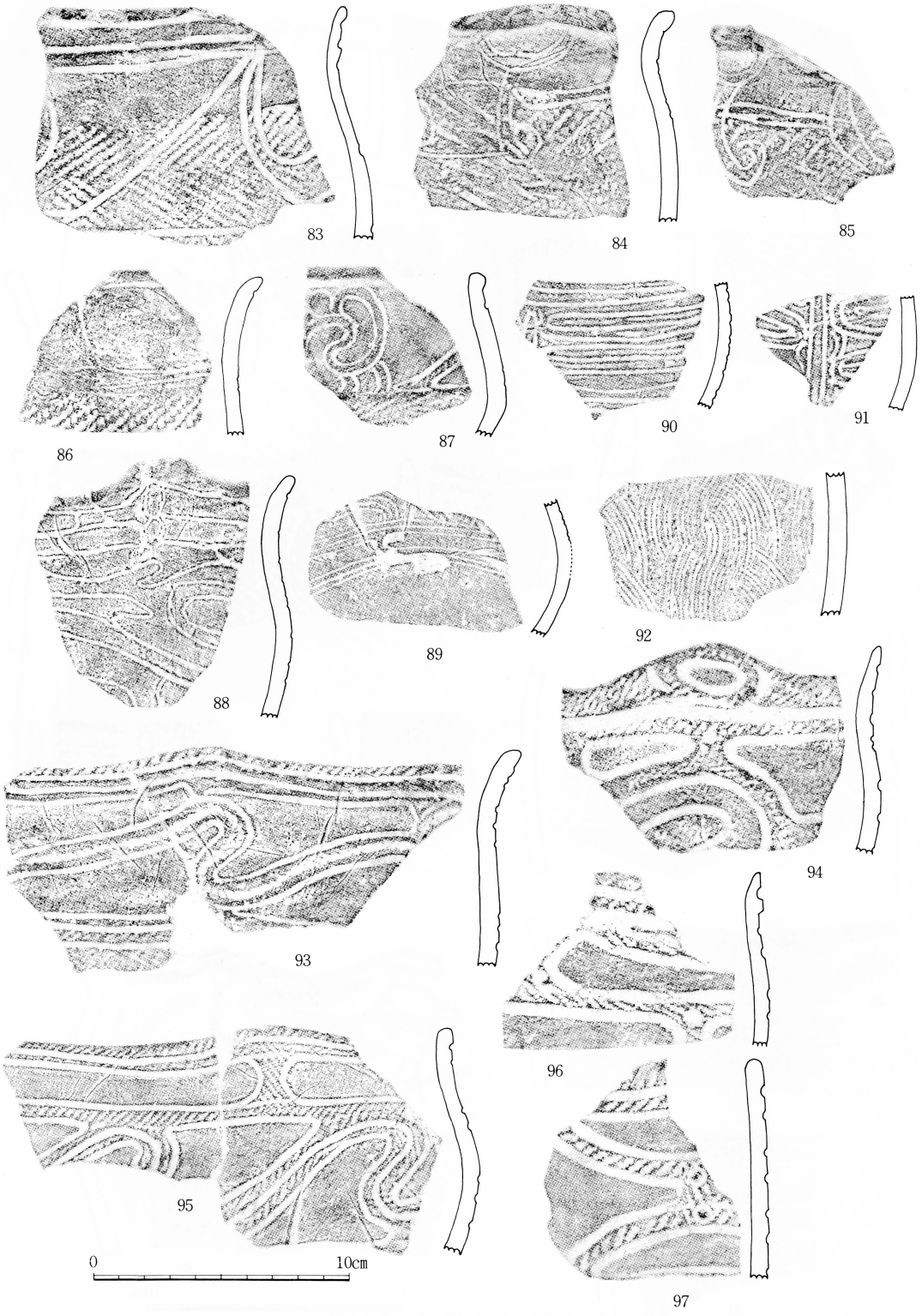

第11図　土 器 拓 影 図 (7)



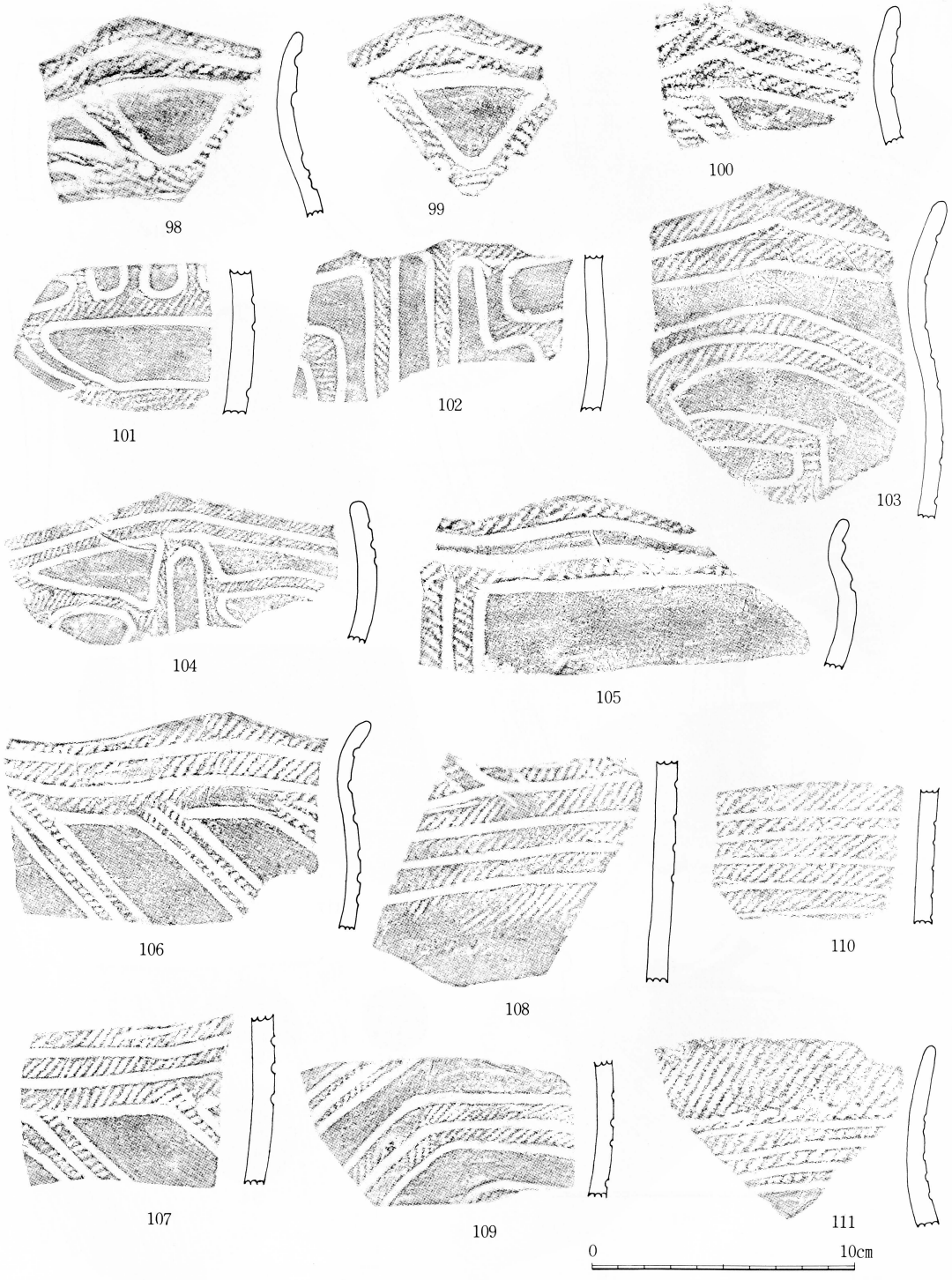

第12図　土 器 拓 影 図(8)



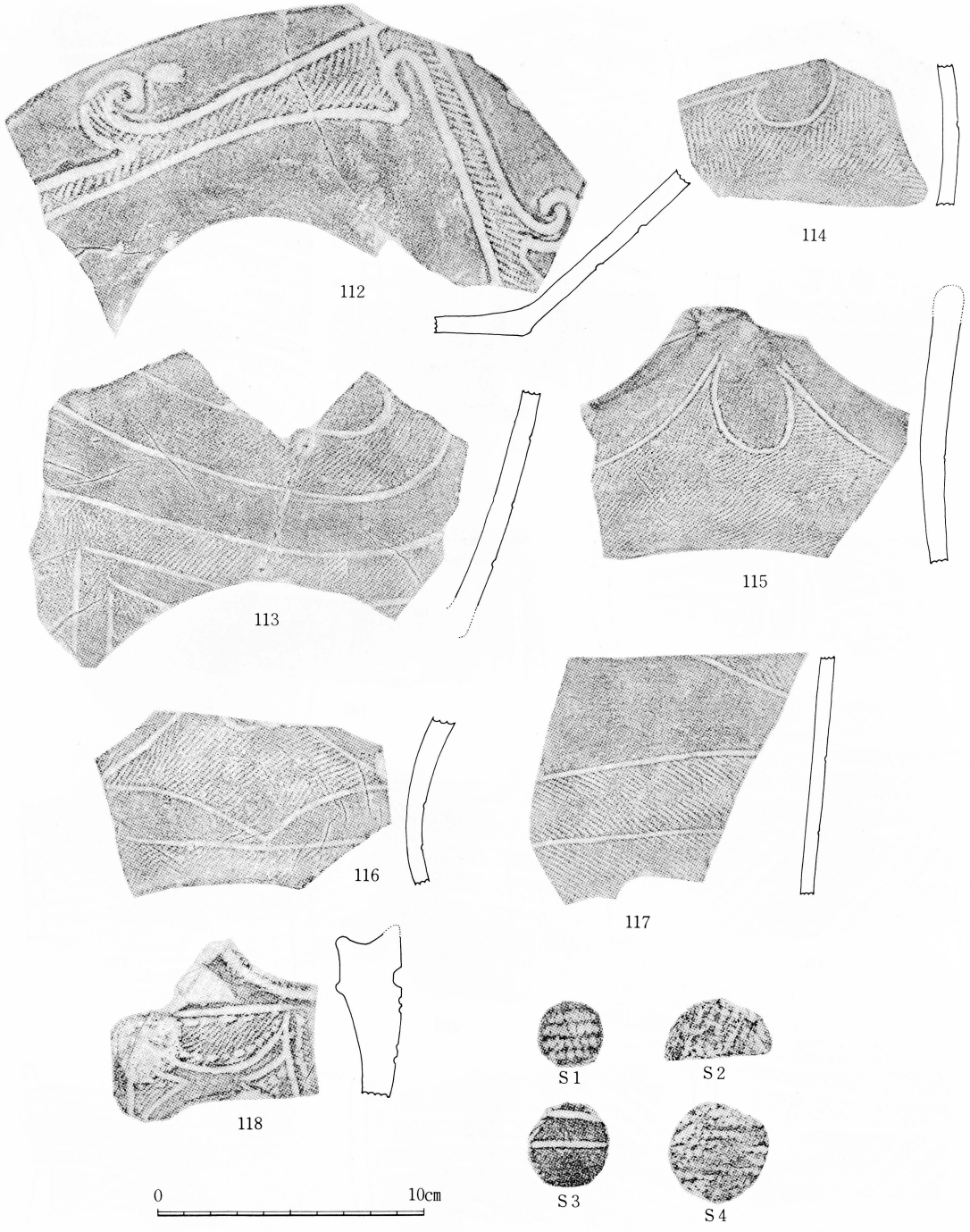

第13図　土 器 拓 影 図 (9)



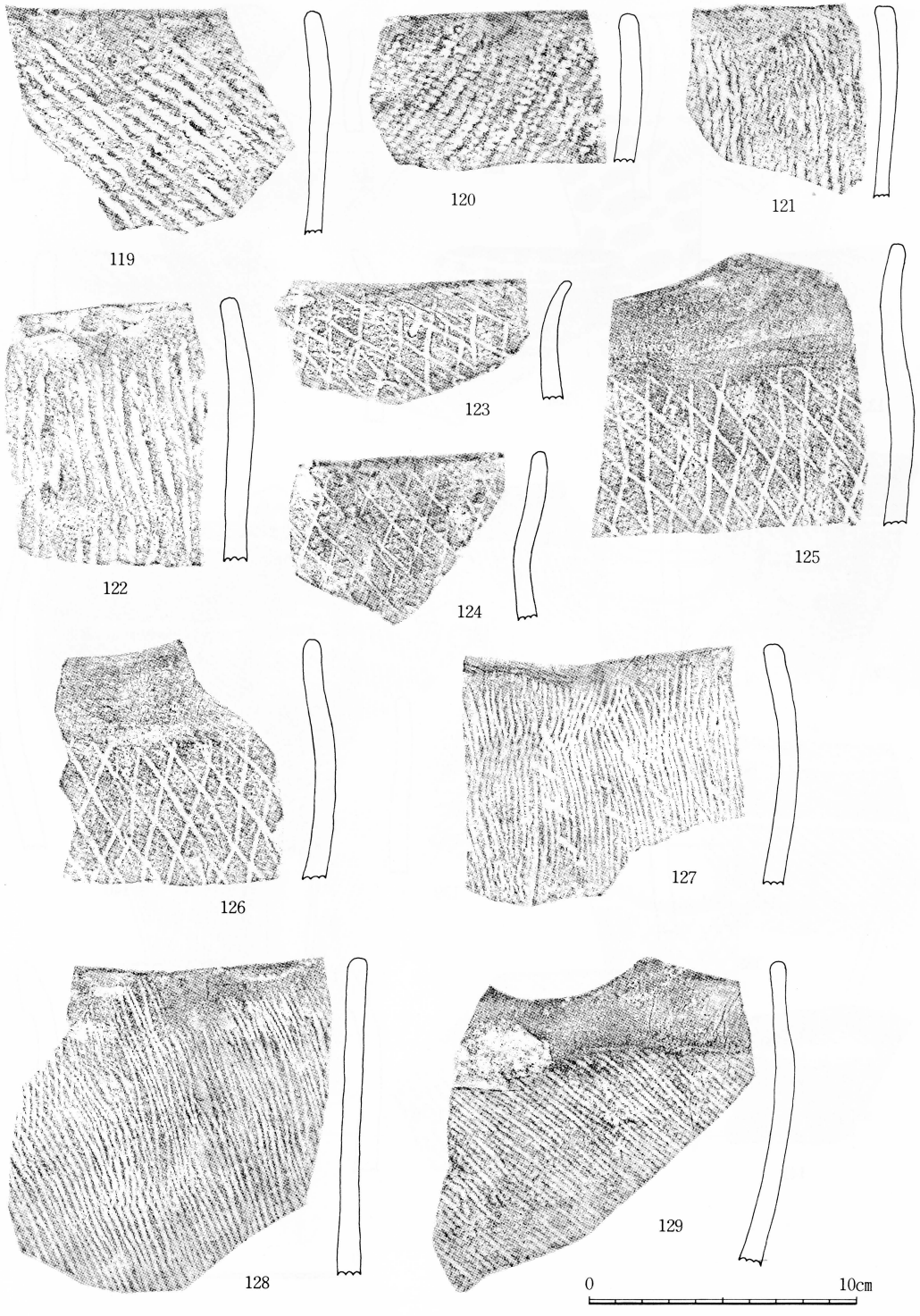

第14図　土 器 拓 影 図 (10)



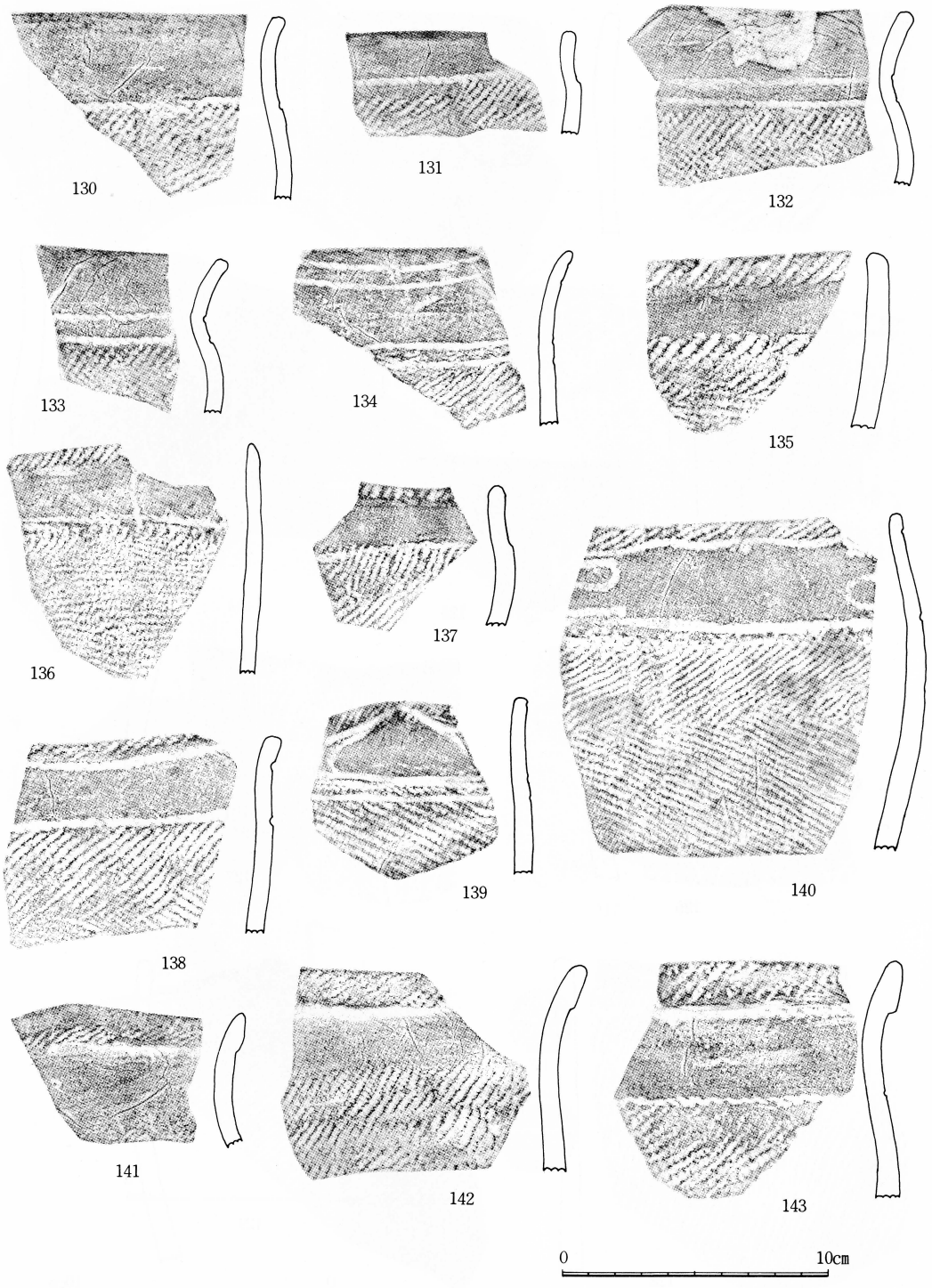

第15図　土 器 拓 影 図 (11)



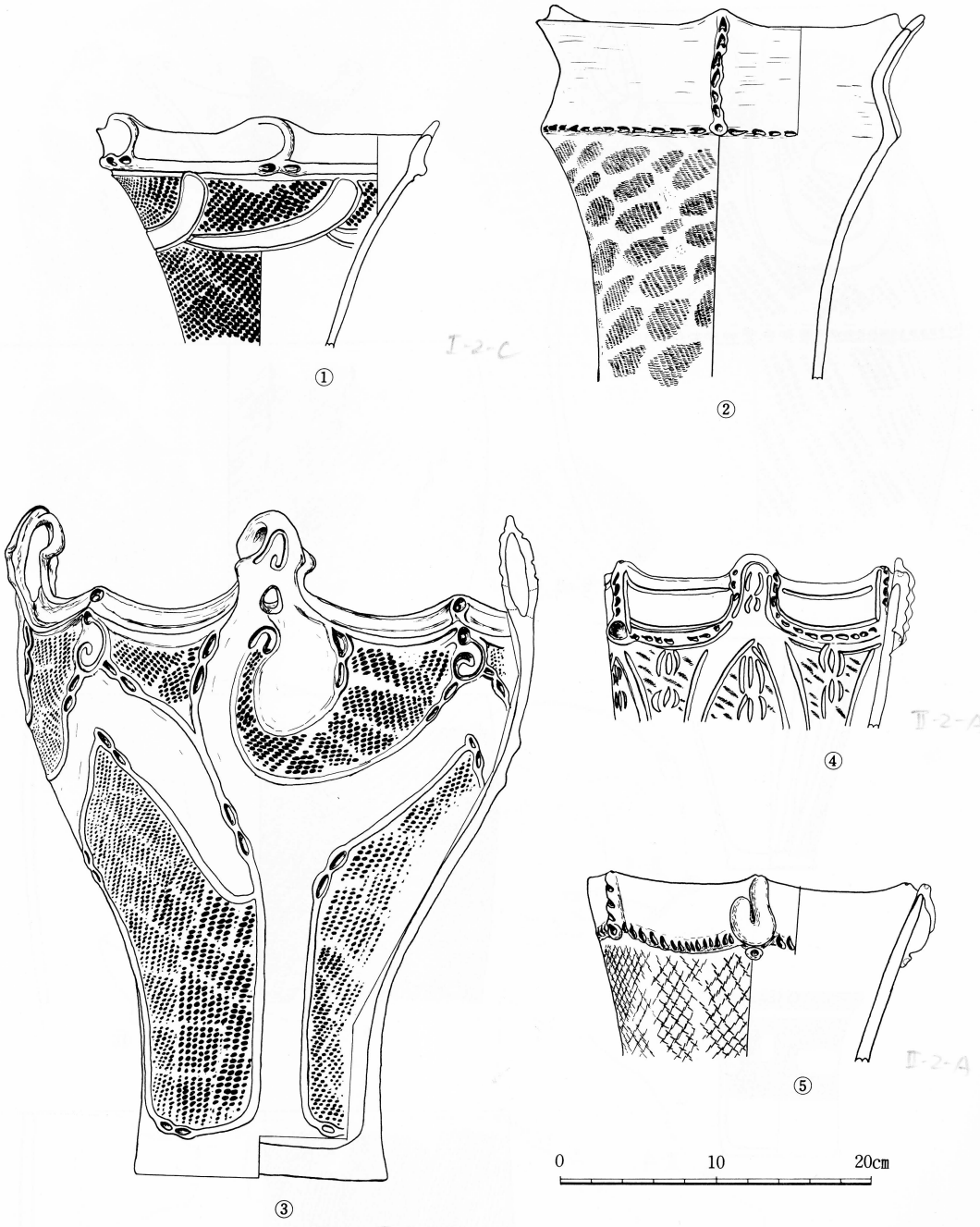

第16図　土 器 拓 影 図 (12)



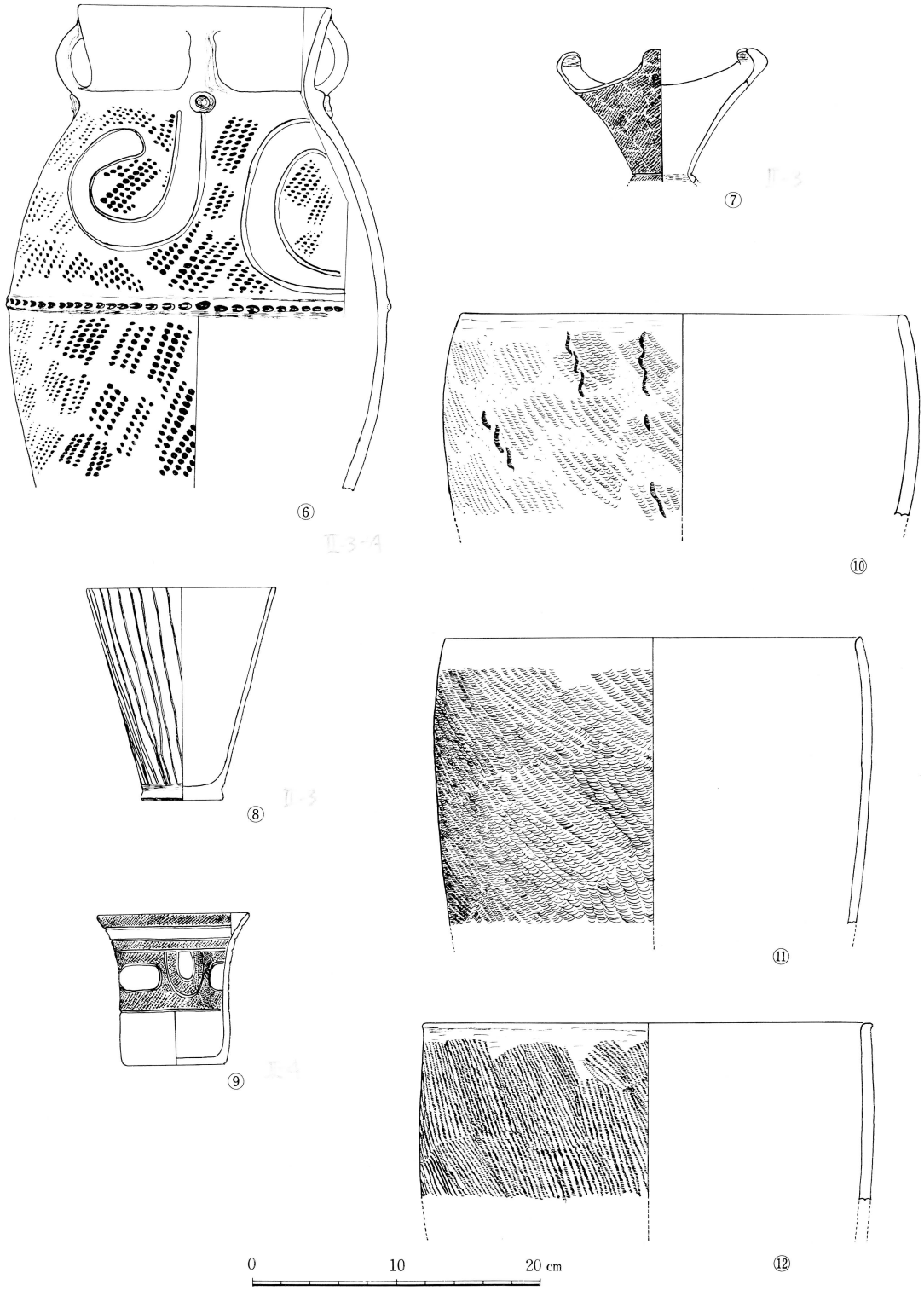

第17図　土 器 拓 影 図 (13)



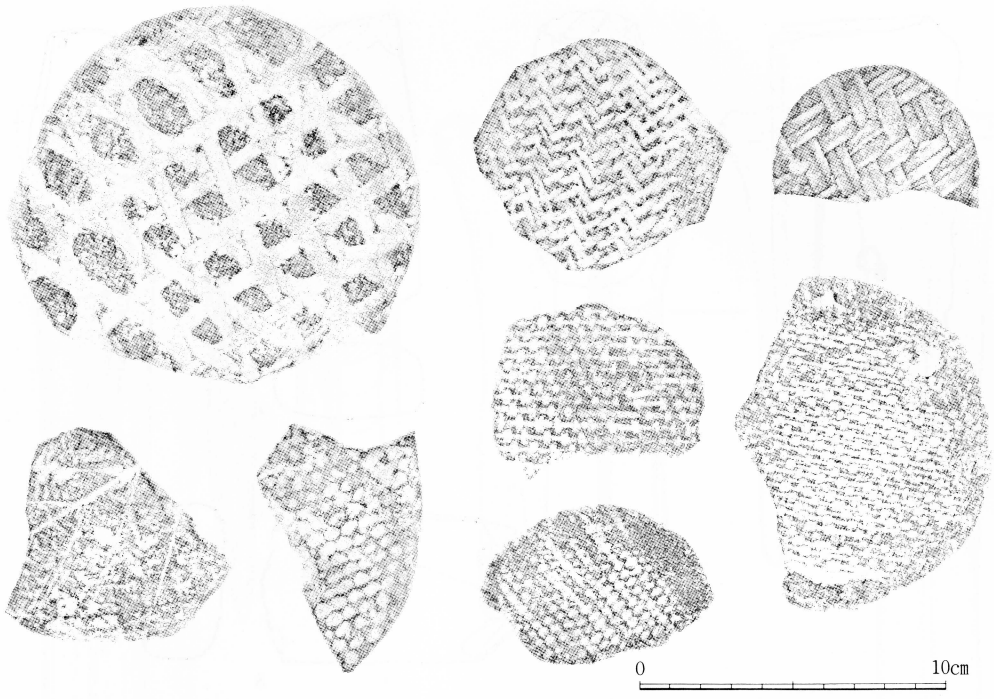

第18図　土 器 拓 影 図 (14)

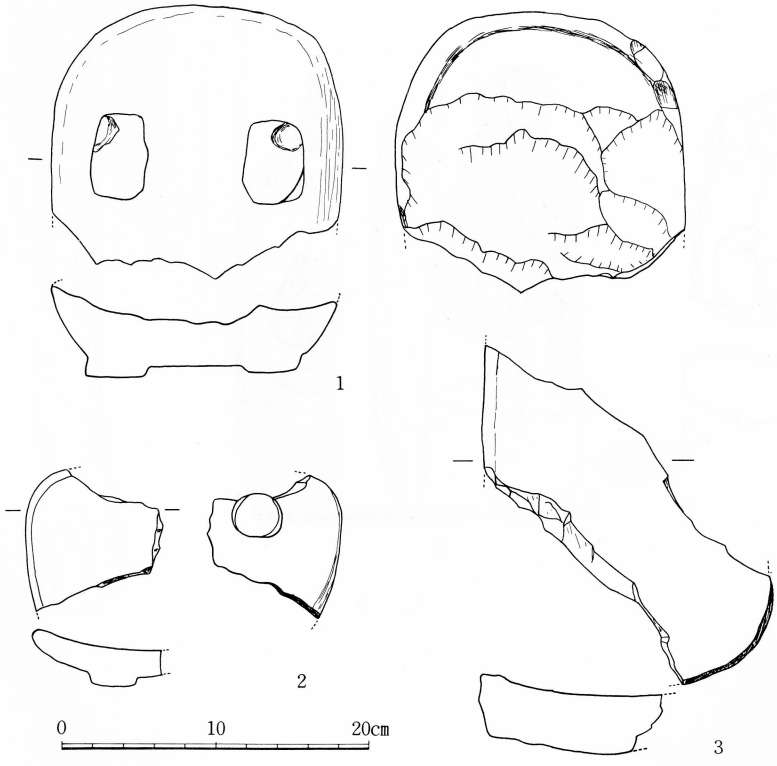



第19図　土 器 実 測 図 (1)

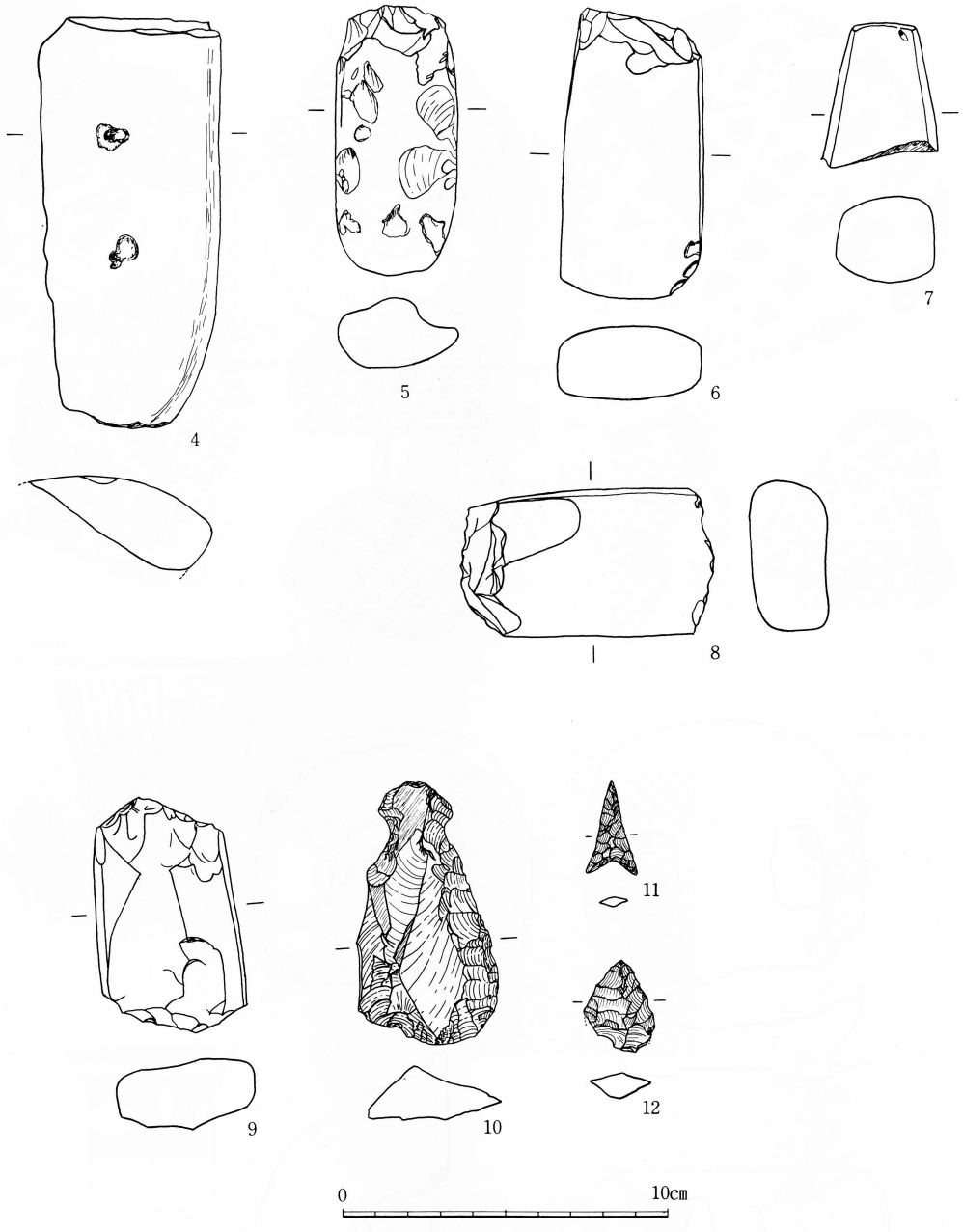



第20図　土 器 実 測 図 (2)

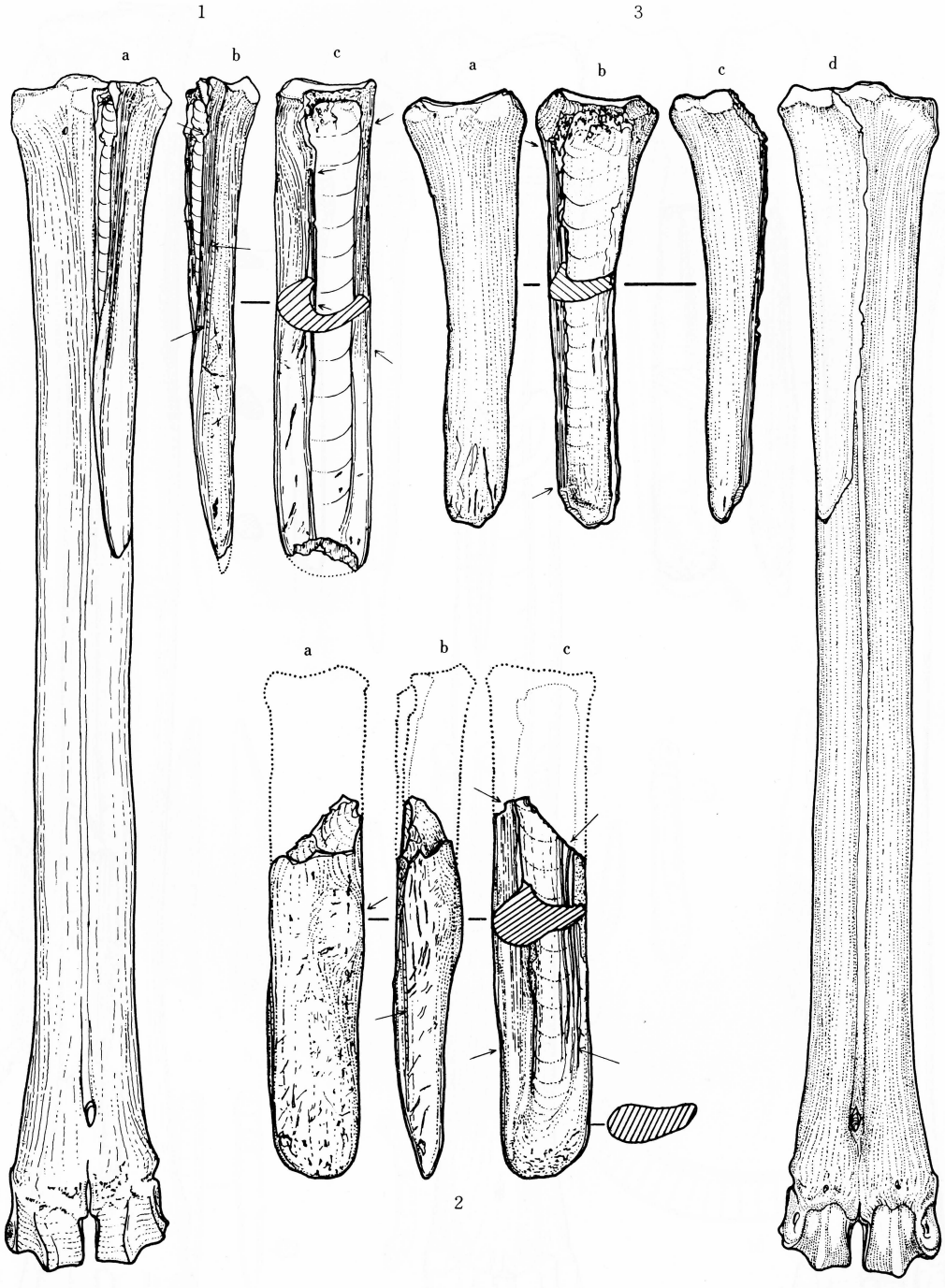


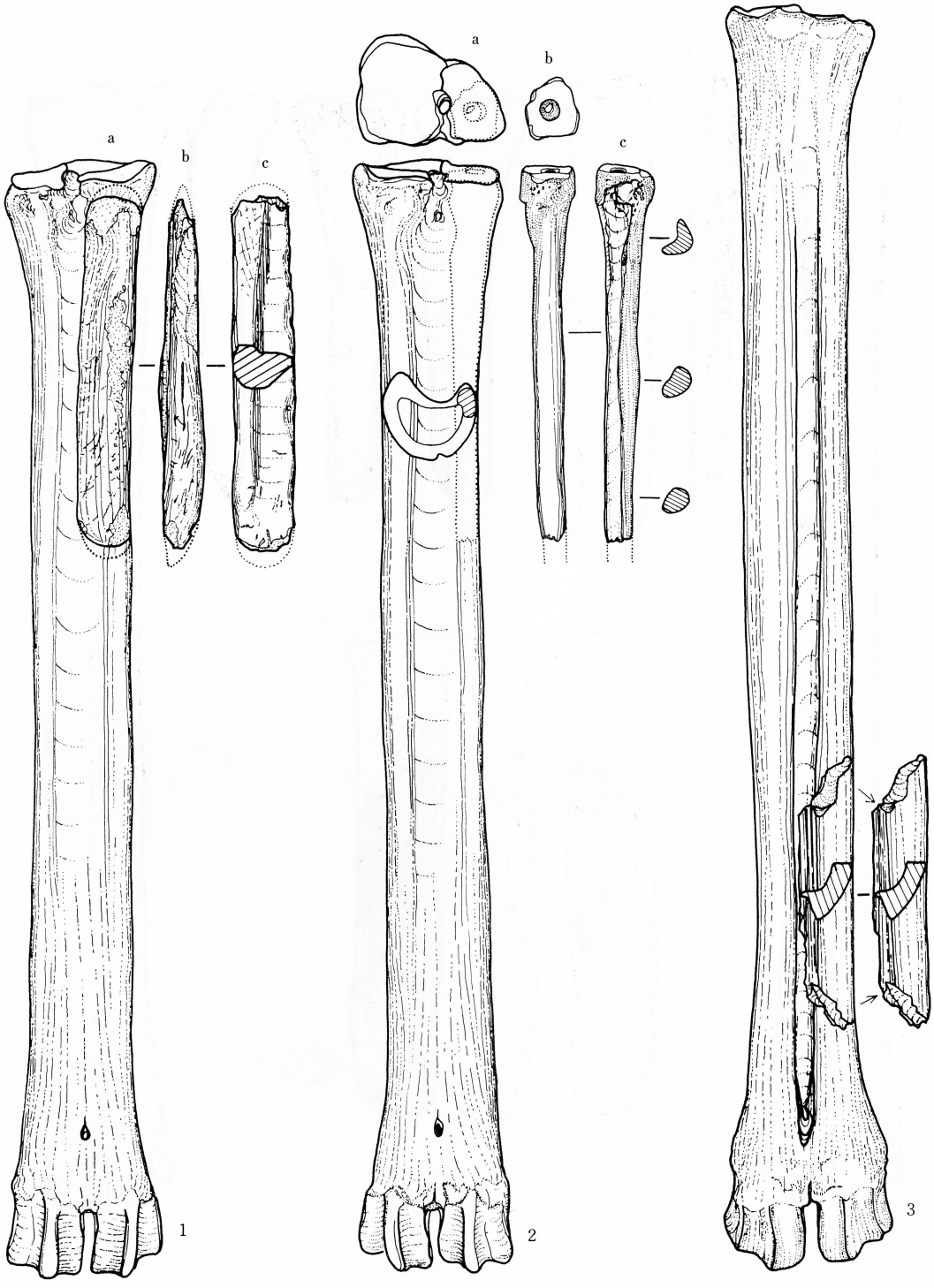

第21図　底部拓影・石器実測図



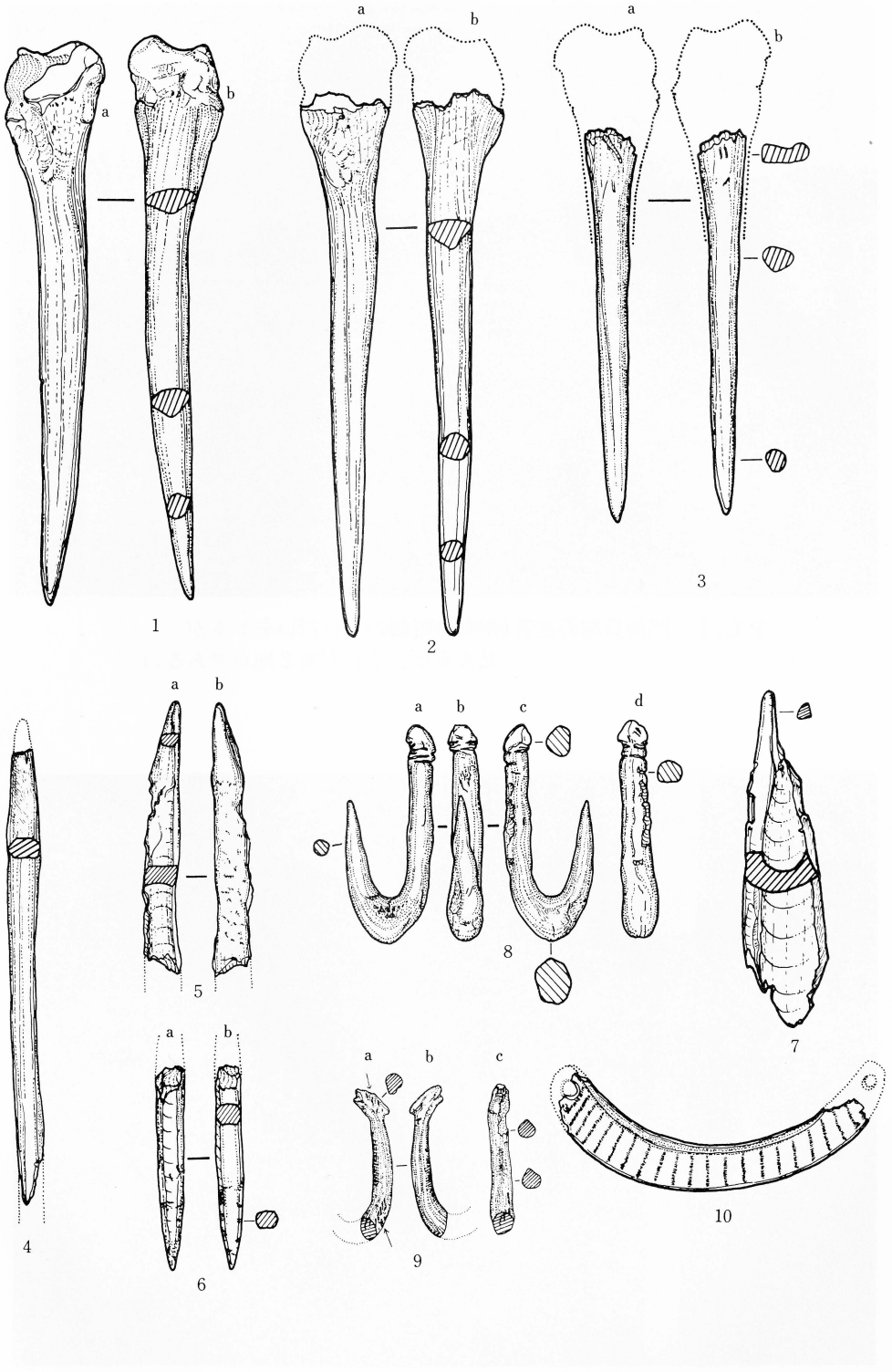

第22図　石 器 実 測 図




第23図　骨角器実測図Ⅰ　（×0.7）

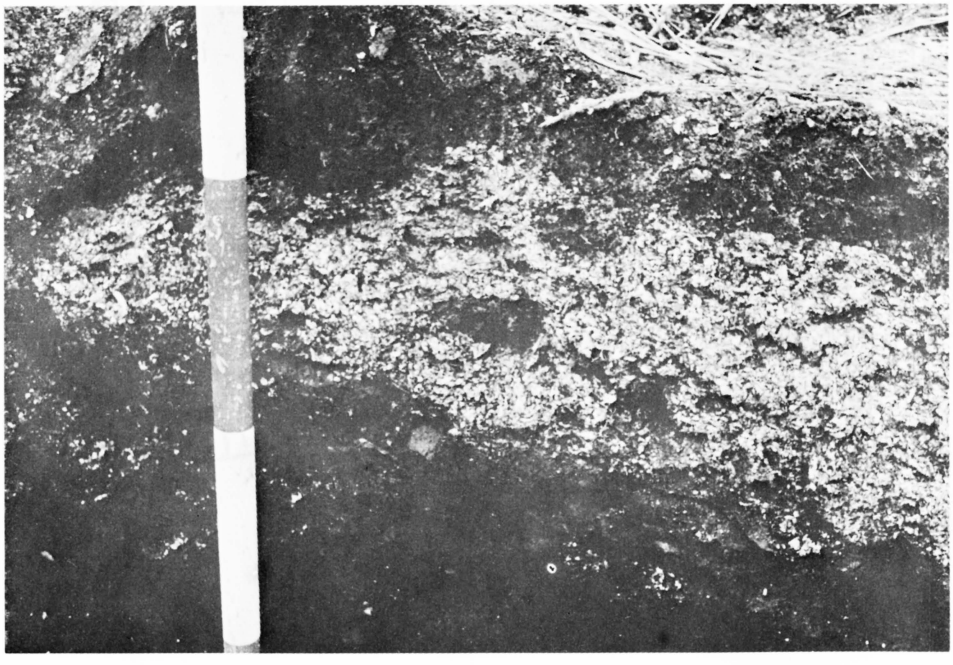



第24図　骨角器実測図Ⅱ　（×0.7）



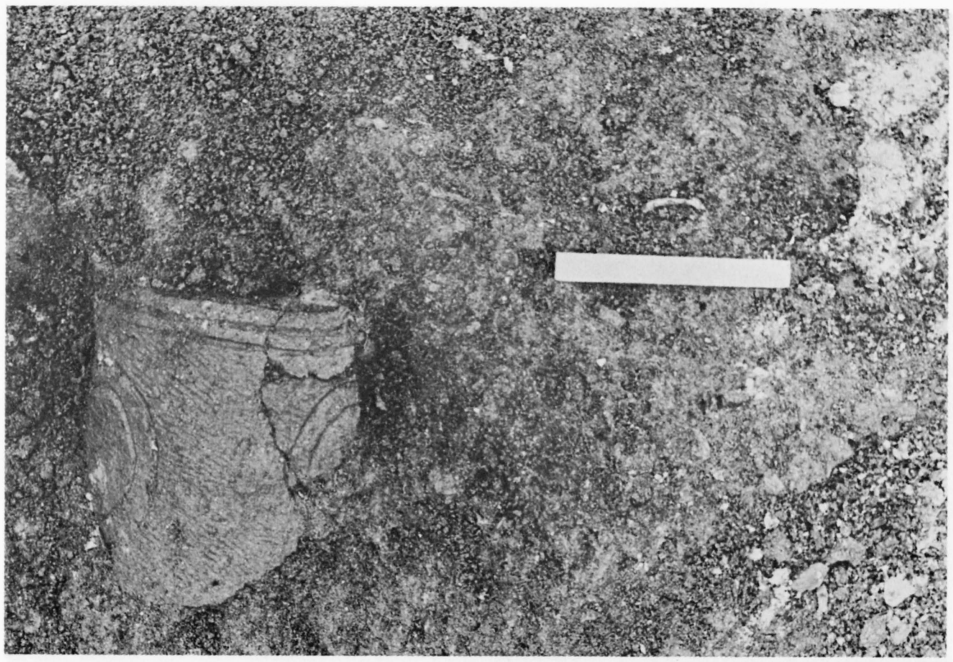

第25図　骨角(貝)器実測図Ⅲ　（× 0.7）

ＰＬ．１　門前貝塚の遠景（中央の屋根の上に白いテントが見えるが、これが第２地点である。）



ＰＬ．２　第１地点の貝層の堆積状況

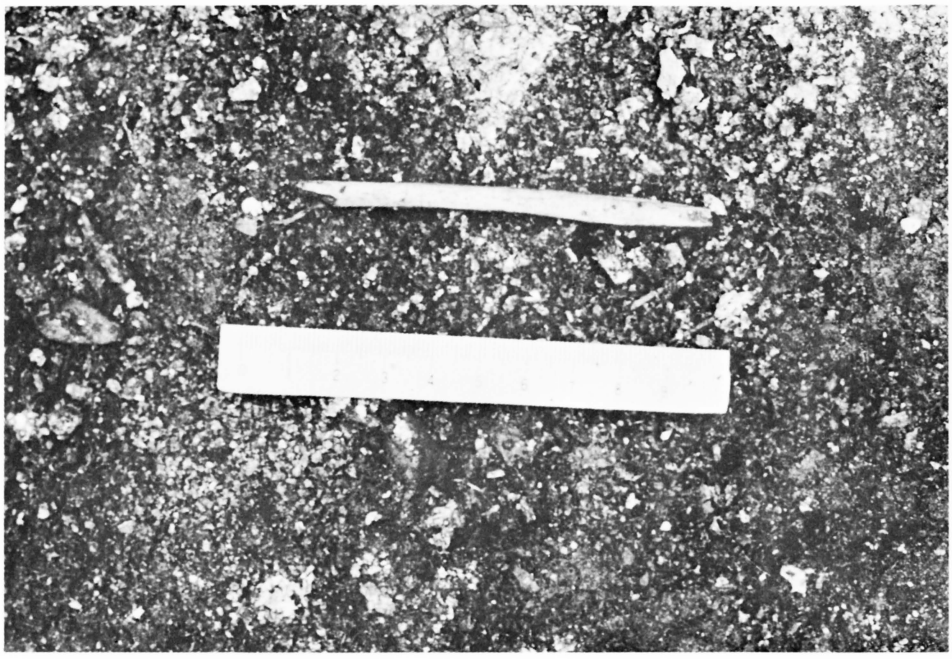
PL. 3　第2地点の住居址（一部分のみ）



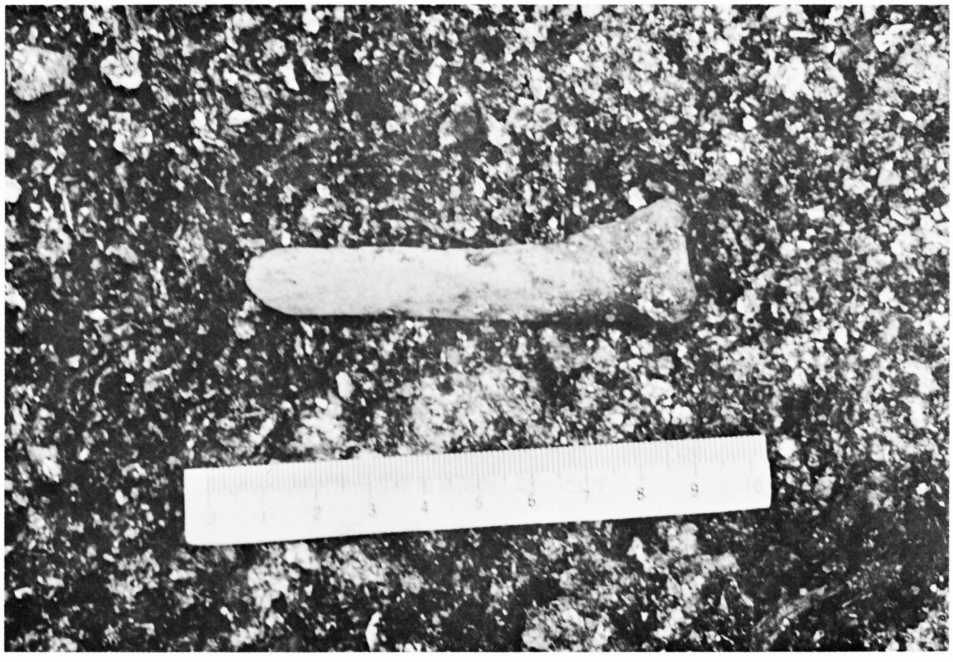
PL. 4　釣針の出土状況（I－E′－3）

PL. 5　土器出土状況（第1地点A区第2層）（Ⅰ－A－2）

PL. 6　土器出土状況（Ⅱ－3）



PL. 7　骨角器出土状況（Ⅰ－F′－3）



PL. 8　骨角器出土状況（Ⅰ－D′－3）

昭和49年10月1日　発行

著者　及川　洵
　　遠藤勝博
　　金子浩昌
　　柳沢清一

発行者　岩手県陸前高田市教育委員会
〒029－22　陸前高田市高田町字館の沖6ノ5

印刷所　高田活版所
〒029－22　陸前高田市高田町字大町5